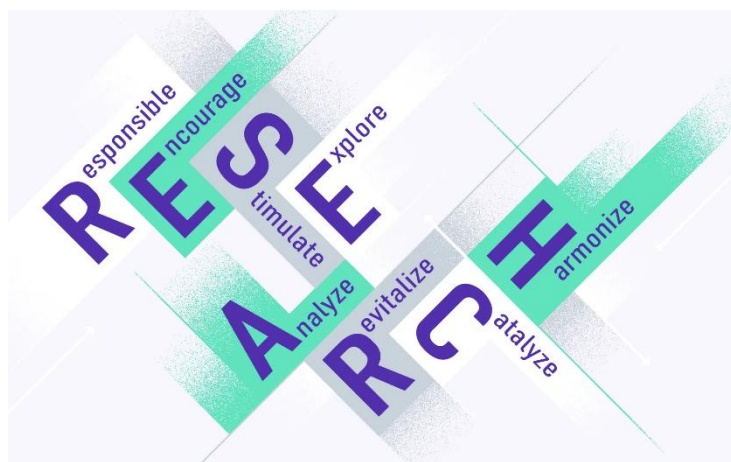

東北大学 Tohoku University
リサーチ・マネジメントセンター
Research Management Center

2024-2025

Annual Report



目 次

あいさつ	2
1. 組織概要	3
1.1 ミッション	3
1.2 沿革	4
1.3 組織	5
1.4 メンバー一覧	6
2. 活動内容	8
2.1 活動項目一覧	8
2.2 活動実績	9
2.3 具体的な活動事例	23
おわりに	51
Appendix	53

あいさつ

研究支援の発展とさらなる飛躍

東北大学に研究支援組織である URA センターが創設されたのは 2012 年です。それ以来、世界標準の研究力分析手法の導入による研究力向上支援、東北大学ファンドの設置や、産学官の新たな組織間連携の推進、などの様々な活動を行い、指定国立大学認定、さらに国際卓越研究大学認定にも貢献してまいりました。

一方で、URA 制度の全国的な普及や研究活動の国際化等に伴い、URA への期待や役割も刻々と変化しています。こうした国内外の情勢変化にも留意しつつ、本学の研究力向上に向けてより一層の充実した支援を行うため、2023 年 4 月に URA センターはリサーチ・マネジメントセンターへと組織変更を行いました。発足時には本部 URA 数名でしたが、国際卓越研究大学認定なども受け、2025 年末には 100 名近くの規模となりました。

現在リサーチ・マネジメントセンターには、全学的な業務を担当する URA と部局等における業務を担当する URA とが所属し、お互いが有機的に連携して研究力強化に努めるとともに URA としてのスキルアップにも励んでいます。本報告書は、本学の URA の組織及び支援活動の内容を俯瞰できるようにしたものです。

国際卓越研究大学にふさわしい研究支援を創造・構築し、研究支援活動のさらなる充実を目指すとともに、研究力の向上を通して社会に貢献できる活動に注力していく所存です。今後ともよろしく願います。

東北大学 理事(研究担当)／研究推進・支援機構長

杉本 亜砂子

東北大学 研究推進・支援機構 リサーチ・マネジメントセンター長

塩入 諭

※所属・肩書等は2026年3月末時点のものです。

1. 組織概要

1. 1 ミッション

東北大学リサーチ・マネジメントセンター(以下、RM センター)は、2012 年にリサーチ・アドミニストレーションセンター(URA センター)として発足しました。研究者としての資質や研究マネジメントの技能と経験を持つ専門職能集団として、全学的な研究戦略に基づき、多様な分析・企画・戦略立案・調査等の活動を通じて、大学執行部及び研究者の方々の活動を支援することで、東北大学の研究力強化に貢献することを主なミッションとしています。具体的には、以下の役割を担っています。

1. 国際研究力強化に関わる情報収集・評価分析
2. 情報収集・評価分析に基づく研究戦略策定等の支援
3. 研究教育の質の向上に関わる諸施策の企画、推進及び支援
4. 研究成果の社会実装の支援
5. 部局を横断する研究協力体制構築等の推進及び支援
6. 研究データの高付加価値化の推進及び研究データの利活用によるオープンサイエンスの支援
7. 研究設備及び機器の整備並びに管理運営等に関わる研究基盤の強化及び支援

今後、上記ミッションのもと、研究戦略の企画立案をはじめ、競争的資金等の獲得(プレアワード支援等)とプロジェクトの企画・運営(ポストアワード支援等)の有機的連携、効率的・効果的な学内外情報の収集・分析・活用、研究者ネットワークの組織化・高度化、全学的な連携のシステム化と適切なマネジメント、研究設備及び機器(コアファシリティ)の整備・運用などをさらに強化することで、国際卓越研究大学にふさわしい研究力向上のさらなる進展を目指してまいります。

1. 2 沿革

RM センターは、2012 年の URA の配置以降、世界標準の研究力分析手法の導入による研究力向上支援、産学官の新たな組織間連携や社会実装によるイノベーション創出(JST COI プログラム、OPERA 等)の支援などの活動を継続的に行い、その結果として、国際卓越研究大学の認定にも貢献してまいりました。

2023 年には本部と部局の URA を取りまとめる全学組織としての RM センターへと改組され、多様な職能を有する URA 群の連携を可能とする体制を整えました。

表 1.1 RM センターの沿革

年度	URA 関連の動き	大学全体の動き
2012	● URA センター設置 ● 本部 URA 雇用開始 ● URA による大型事業提案、大型事業推進などの支援業務開始 ● URA による大学発スタートアップ創出の支援業務開始(官民イノベーションプログラム採択後)	
2013	● 研究大学強化促進事業採択 ● 部局 URA 配置開始 ● 知の創出センター設置 ● URA による研究力分析などの業務開始 ● URA による JST COI プログラム採択に向けたプレアワード活動及び拠点立ち上げ支援	
2015	● URA 連携協議会発足 ● URA 重点化スキル策定、重点化スキル育成コースを開講	
2016	● 産学連携機構企画室を設置し、URA センターURA を兼務配置	
2017		● 東北大学が指定国立大学法人に指定
2019	● URA 評価昇任制度整備、無期雇用 URA 制度導入	
2023	● リサーチ・マネジメントセンターへ改組。戦略企画部門、研究力強化部門、産学連携強化部門を設置	
2024	● オープンサイエンス推進部門、コアファシリティ強化部門、人材スキル開発部門を設置	● 東北大学が国際卓越研究大学に認定(第一号)

1. 3 組織

RMセンターは、総長・プロボスト・研究担当理事のリーダーシップのもと、研究推進・支援機構に設置されており、本部及び部局等に配置された100名近くのURAで構成されています。

2023年に、「戦略企画部門」、「研究力強化部門」、「産学連携強化部門」が設置され、翌年には、「オープンサイエンス推進部門」、「コアファシリティ強化部門」、「人材スキル開発部門」が設置されました。そして、これら6部門が縦割り化されないよう、各URAが積極的に連携し、多様な支援活動を行ってまいりました。

また、URA同士を繋ぎ、組織として有機的に活動を進めるべく、定期的にURA連携協議会やスキルアップセミナーなどを開催し、全学的な情報交換や互いの能力向上を図ってきました。さらに、本部事務機構とも連携することによって、機動的な活動ができる体制を整えています。

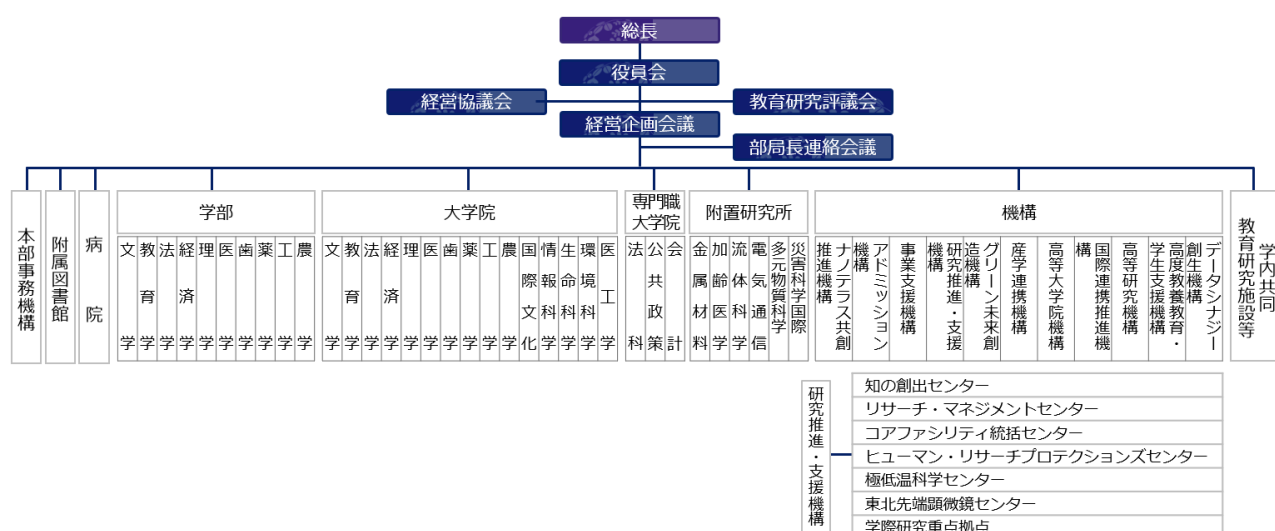


図1.1 東北大学運営組織

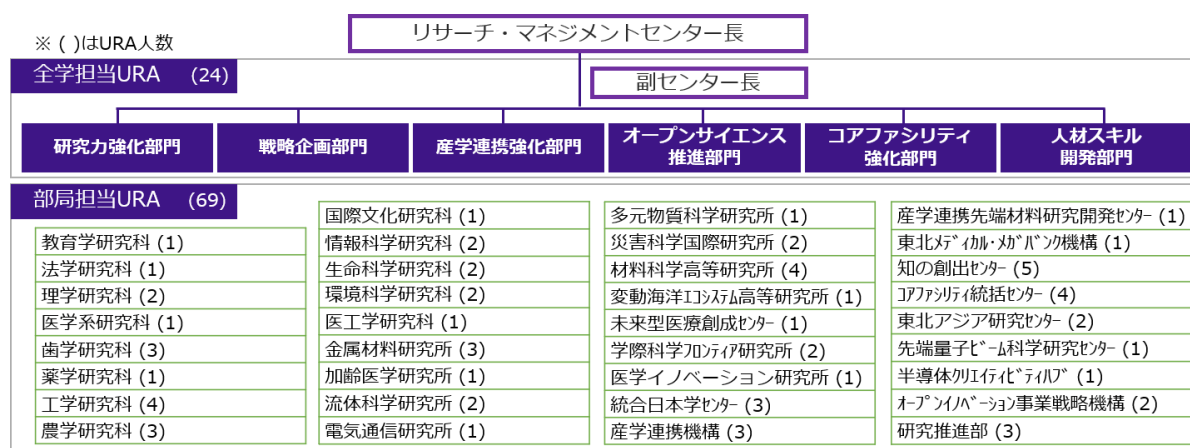


図1.2 リサーチ・マネジメントセンターの組織図(2025年度)

1.4 メンバー一覧

本部に配置された全学的な業務を担当する URA は、活動の効率化と成果の最大化を実現すべく、各部門で活動しています。連携を深める意味合いから、一部の URA は複数の部門を兼務しています。（以下の一覧では部門長以外については、本務のある部門に振り分けて表示しています。）

※所属・肩書等は2026年3月末時点のものです。

【戦略企画部門】



荘司 弘樹
部門長
特任教授 首席 URA

[担当]
研究企画・立上げ支援、
国プロ獲得・運営支援、
研究調査・分析



蔭山 麻里子
特任教授 首席 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金、
プロジェクト企画・運営



堀野 秀幸
特任教授 首席 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金、
プロジェクト企画・運営



村田 昭子
特任教授 首席 URA

[担当]
競争的資金、プロジェクト企画・運営



吉田 明
特任教授 首席 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金、
プロジェクト企画・運営



矢田 哲也
特任講師 主任 URA

[担当]
競争的資金、プロジェクト企画・運営、イベント

【研究力強化部門】



荘司 弘樹
部門長
特任教授 首席 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金、
プロジェクト企画・運営



仲島 義貴
特任教授 首席 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金、
プロジェクト企画・運営



マーク・ハンゼン
特任准教授 上席 URA

[担当]
研究力分析



和田 匡路
特任准教授 上席 URA

[担当]
研究力分析



川崎 能彦
特任准教授 上席 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金、
プロジェクト企画・運営



野澤 俊太郎
特任准教授 上席 URA

[担当]
プロジェクト企画・運営



境野 飛鳥
特任講師 主任 URA

[担当]
競争的資金、プロジェクト企画・運営、イベント、
スキルアップセミナー



ジェイソン・サンダーソン
特任講師 主任 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金

【産学連携強化部門】



佐藤 準
部門長
特任教授 首席 URA

[担当]
競争的資金、プロジェクト企画・運営、スキルアップセミナー



稲穂 健市
特任教授 首席 URA

[担当]
競争的資金、プロジェクト企画・運営、イベント、スキルアップセミナー



宮島 雅史
特任教授 首席 URA

[担当]
競争的資金



清水 一徳
特任准教授 上席 URA

[担当]
競争的資金、プロジェクト企画・運営



千葉 俊樹
特任准教授 上席 URA

[担当]
研究力分析、競争的資金、プロジェクト企画・運営



松原 雄介
特任准教授 上席 URA

[担当]
競争的資金、プロジェクト企画・運営、スキルアップセミナー



森 綾香
特任准教授 上席 URA

[担当]
プロジェクト企画・運営

【オープンサイエンス推進部門】



濱手 雄一郎
部門長
特任教授 首席 URA

[担当]
研究力分析、プロジェクト企画・運営、全学コアファシリティ



菅原 良
特任教授 首席 URA

[担当]
競争的資金



ソウ・ブバカル
特任助教 URA

[担当]
研究力分析、プロジェクト企画・運営、全学コアファシリティ



中島 功雄
特任助教 URA

[担当]
研究力分析、プロジェクト企画・運営、全学コアファシリティ

【コアファシリティ強化部門】



坂園 聡美
部門長
特任准教授 上席 URA

[担当]
プロジェクト企画・運営、全学コアファシリティ

【人材スキル開発部門】



臼澤 基紀
部門長
特任准教授 上席 URA

[担当]
競争的資金、スキルアップセミナー

2. 活動内容

RM センターでは、これまでの約 14 年間に及ぶ活動の中で、研究戦略推進、研究 IR・研究力分析、産学官連携活動支援、国際戦略支援、広報・アウトリーチ・URA 教育をはじめ、多様な活動を行ってまいりました。ここでは、具体的な活動項目のほか、2024 年度及び 2025 年度の実績と具体的な活動事例についてご紹介します。

2. 1 活動項目一覧

RM センターの活動内容を大きく6つの項目に分け、以下にその概要を示します。

表 2.1 RM センターの活動概要

No	項目	概要	担当部門
1	研究戦略推進	国家戦略や社会ニーズを踏まえた大学の戦略を策定するための調査・分析や、全学の研究力を向上するための情報提供・アドバイス	● 戦略企画部門 ● 研究力強化部門
2	オープンサイエンス／DX 推進	研究の効率化や新たなイノベーションを加速するオープンサイエンス及びそれを支える「研究 DX」を通じた研究プロセス革新の推進	● オープンサイエンス推進部門
3	競争的資金等の獲得（プレアワード支援等）	科研費をはじめとする様々な競争的資金の獲得に向けた、申請書作成に係る情報提供・アドバイス	● 産学連携強化部門 ● 研究力強化部門
4	プロジェクトの企画・運営（ポストアワード支援等）	各種研究プロジェクトから創出する成果の最大化に向けた、企画立案・運営・成果活用・外部連携支援等	● 産学連携強化部門 ● 研究力強化部門
5	全学コアファシリティの強化	全学コアファシリティの強化により本学の研究環境を高度化するための、各種施策の企画・立案やコアファシリティの管理運用業務	● コアファシリティ強化部門
6	人材育成	研究成果の公開に係る情報提供やスキル向上のためのセミナーの開催	● 人材スキル開発部門

2. 2 活動実績

RM センターの活動項目ごとの主要な実績を、以下に示します。

(1) 研究戦略推進

【活動メニュー】

1. 国際研究力強化を含む研究戦略策定支援

- 国際研究力強化シナリオ作成支援
- 国際卓越対応・論文指標の調査およびモニタリングを実施
- 国際卓越人材候補者の論文指標値の確認を実施(HCM 室依頼)
- 全部局対象:本学の研究成果の社会波及を目的としたセミナーの企画・実施(全 28 部局)

2. 研究力分析業務

2.1 研究力モニタリング

- 本学及び各部局、CRC/RC の研究力モニタリング

2.2 情報収集及び分析・レポート作成

- 研究動向調査・分析(災害科学、スピントロニクスなど)研究動向分析
- 政策動向調査・分析(各種府省庁委員会、CRDS、NISTEP 等)
- 論文指標データ調査・分析・情報共有(Top10%論文情報配信サービス、ゼロ引用文献調査)
- 世界大学ランキング分析(THE & QS)

2.3 情報基盤・ツール管理(正確な研究力モニタリングの貢献、分析手法のアップデート)

- 情報基盤の維持・更新
(東北大学スカラー(Pure)のコンテンツ更新、各種データベース(DB)およびツールの契約更新、機能性・利用状況の見直し)
- エルゼビア、クラリベイト、Nature などの関係者との協議

2.4 研究支援 DX

- 研究者マッチングツール活用法
- 各分野の研究動向を分析することができるトピック分析手法を開発
- RUC の MIRAI-DX、C4RA、ScholAgora、ISIJ 編集委員会、ORCID Japan Consortium、RA 協議会、Science of Science 研究会、研究評価勉強会などでの情報発信および情報収集
- Python プログラムによる API を活用したモニタリングワークフローの確立

3. 国際研究戦略支援

- 世界各国・地域、研究機関等の研究動向調査(英国、アフリカなど、及び韓国・高麗大学、ミネソタ大学、モハメッド 6 世ポリテクニク大学など)
- JST の NEXUS、ASPIRE などの国際事業に関する調査・分析など、競争的資金プログラムへの申請に際しての国際連携・マッチング支援

【活動概要及び主要活動例】

RM センターでは、本学の研究戦略である3階層構造を踏まえた活動を実施しています。

まず、第 1 層(トップレベル研究強化)のコアリサーチクラスター、第 2 層(分野融合研究)のリサーチクラスターや研究所等を対象とし、研究デザインの作成支援を担っています。社会のニーズや科学技術の進展を的確に捉え、長期的な視点から研究力強化及び国際連携拡大等の戦略を策定することで、本学の研究の持続的な発展に貢献しています。

また、研究課題の探索や研究者の確保などのためには、内閣府をはじめとする政策資料や、JST/CRDS や NEDO/TSC などの報告書、海外 FA(NIH, Horizon Europe 等)に関する情報が重要であることから、これらの情報を収集・分析し、全学の URA に向けても展開しています。

2024/2025 年度の主要活動例

- 国際卓越研究大学構想支援(研究力モニタリングや研究人材獲得支援等)
- 論文指標に関するセミナーの実施
- 研究力分析・調査(例 災害科学分野の研究動向調査)
- 政策動向・研究動向調査分析報告ページ開設し、定期的に情報を提供
- 掲載情報:政策・研究動向(国内省庁:内閣官房、内閣府、文科省、外務省、厚労省、JST、NEDO、AMED など、国際機関、各国:米国、EU、英国、フランス、ドイツ、カナダ、オーストラリア、韓国、中国、シンガポール など)の情報を分野別に蓄積
- 国際化支援(アフリカやインドの研究機関の研究力調査)
- 競争的資金獲得支援(大型プロジェクト、外国人研究者申請等)
- 研究プロジェクト運営支援(大型プロジェクトのポストアワード)
- 研究企画支援(学際テーマ検討等) など

政策動向・研究動向の調査分析報告ページ開設

- ・掲載項目
政策・研究動向の情報を分野別に蓄積
国内省庁とファンディングエージェンシー
国際機関 (米国、EU、英国、カナダ、豪州、韓国、中国 など)
内容: 令和 8 年度概算要求、令和 7 年度補正予算、
Horizon Europe、AI for Science、日本成長戦略17分野
週次報告: 国内31件、海外31件
- ・掲載頻度 毎週
- ・提供対象 2025年度全学URA、2026年度中に全学教職員



図 2.1 政策動向・研究動向の調査分析に関わる活動

そして、研究者個人の支援、個別の学際連携、調査・分析、DB 等ツール整備、利用、スキルアップを行っており、本学の研究者がその能力を最大限に発揮できるよう、様々な側面からサポートする役割を担っています。研究資金の獲得支援から研究テーマの推進、研究環境の整備、研究者の育成まで、幅広い活動を通じて研究力の向上に貢献しています。

なお、本学の研究戦略は、第 1 層から第 3 層まで連動した戦略であるため、「戦略企画部門」と「研究力強化部門」が、密接に連携しながら本学の研究戦略推進支援を行っています。具体的には、中長期的な研究戦略や重点領域、外部資金獲得の方向性から、「戦略企画部門」が詳細な支援策を立案し、その情報を「研究力強化部門」が受け、また、「研究力強化部門」が研究現場のニーズや課題、研究成果の状況など、戦略の見直しや新たな施策の検討に資する情報を「戦略企画部門」に提供しています。

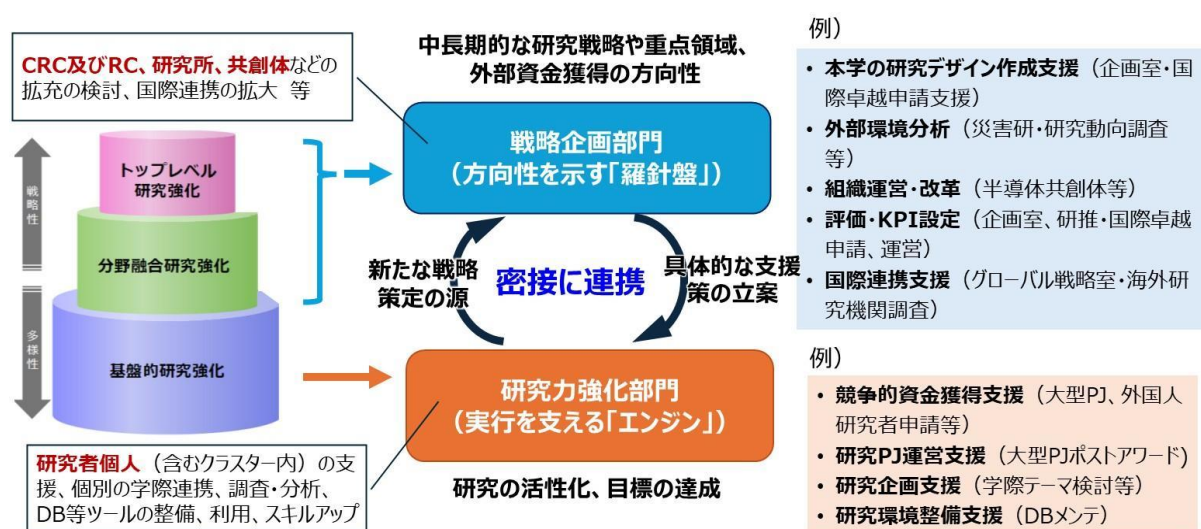


図 2.2 戦略企画部門と研究力強化部門の役割

2024/2025 年度の個別の活動事例（詳細については 2.3 参照）

- 研究戦略・政策動向ポータルによる情報提供
- 本部担当 URA による多種多様な部局との対話：部局セミナーを通して
- 情報基盤整備：研究活動の見える化とデータのキュレーション
- 内閣府上席科学技術政策フェローとしての活動
- 「東北大学知財セミナー」開催支援
- 「全国キャラバン 3QUESTIONS 東北地区編」の開催運営支援
- 第 11 回人文・社会科学系研究推進フォーラムの開催

(2)オープンサイエンス／DX 推進

【活動メニュー】

1. 研究データ管理(RDM)支援

- 研究データ管理・公開ガイドライン策定(4 月公開予定)

2. オープンアクセス(OA 支援)

- オープンアクセスに関する情報提供
- オープンサイエンスポータルサイトの開発(3 月公開予定)

3. 大学情報 DB

- 競争的研究費等公募情報ウェブサイト(新着情報メール)
- 論文 DB、外部資金 DB 開発・運用

【活動概要及び主要活動例】

RMセンターでは、「オープンサイエンス推進部門」を中心に、東北大学オープンサイエンス推進基本方針に基づいて、データシナジー創生機構、情報部、図書館等と連携し、研究データの管理・公開や論文のオープンアクセスを強力に推進し、膨大な成果や研究データを社会へ還元する中核を担っています。

2024/2025 年度の主要活動例

- 統合的支援プラットフォーム「DMR-OA アプリ」開発:データ管理計画の策定から論文の即時 OA 対応, 各種報告書対応までの手続きを一元化し、研究者の負担感を軽減して RDM ならびに OA 化の推進を図るアプリ
- オープンサイエンス推進ポータルの開発:本学の研究者・学生が、研究成果の発信および研究データ管理を行う際に役立つ知識や、附属図書館によるオープンアクセス、オープンサイエンスに関する支援情報を発信するサイト
- 競争的資金公募情報システム:研究分野や関心に基づいた公募情報をリマインドメールで配信する新しい研究支援 Web サイト
- オープンサイエンスセミナー:オープンサイエンス推進、研究に関わる全学 DX 基盤の整備・運用、データ駆動型研究を推進する啓発活動

研究に関わる多様なデータのDX、オープンサイエンス化

- ・研究データ管理（RDM）支援
研究データ管理・公開ガイドライン策定（4月公開予定）
研究データ保存・共有基盤の開発
- ・オープンアクセス（OA）推進
オープンサイエンスポータルサイトの開発（3月公開予定）
- ・大学情報DB
競争的研究費等公募情報ウェブサイト（新着情報メール）
論文DB、外部資金DB開発・運用



図 2.3 研究データの DX・オープンサイエンス化に関わる活動

2024/2025 年度の個別の活動事例（詳細については 2.3 参照）

- オープンサイエンスセミナー「AI for Science を考える」の企画運営

(3) 競争的資金等の獲得支援（プレアワード支援等）

【活動メニュー】

1. 競争的資金等の公募に係る情報提供・申請支援

- 研究助成金推薦メールシステムを通じた競争的資金等、公募情報の案内
- 科研費の申請支援
- JST、AMED、NEDO 等の委託事業の申請支援
- 各種大型競争的資金模擬ヒアリング対応

2. SOKAP(Sustainability Open Knowledge-Action Platform)等の学内研究助成事業の実施

3. 日本学術振興会特別研究員への申請支援

【活動概要及び主要活動例】

2013 年の URA センターの設置以来、本学では分野横断的プロジェクトや大型事業を主軸に、構想段階からのプレアワード支援から、採択後の運営・研究開発・産学連携を担うポストアワード支援まで、一気通貫の伴走型支援を行ってきました。

プレアワード支援に関しては、「研究力強化部門」を中心に、学術の深化・融合分野シーズ創出、グローバル化に対応する支援を、また、「産学連携強化部門」を中心に、社会実装の加速を目指す応用研究に対応する支援を行っています。さらに、広範な研究・技術分野の理解を必要とする競争的資金制度については、RM センター内に横断的に構築した両部門を中心とした体制により支援しています。

このように、「産学連携強化部門」と「研究力強化部門」が協働することで、従来の大型拠点形成事業に加え、以下に示すように支援対象を拡大してきました。

2024/2025 年度の主要活動例

- 学術の深化・融合分野シーズ創出: 人文社会科学分野の科研費(JSPS)や、JST 基礎研究事業への重点支援
- グローバル化: 外国籍研究者を対象とした英語による提案支援の拡充
- 社会実装の加速: JST・NEDO・JAXA 等の実用化フェーズにおける競争的研究費獲得支援 など

RM センターとして支援を行った主な事業とその支援内容を表 2.2 に示しました。具体的な支援内容としては、①公募情報収集、②申請構想企画、③申請書作成、④申請書ブラッシュアップ、⑤面接資料作成、⑥面接資料ブラッシュアップ、⑦面接練習、が挙げられます。

表 2.2 各事業の支援数・採択数及びその支援内容

FA 等	事業名	2024		2025		支援内容
		支援数	採択数	支援数	採択数	
JSPS	科学研究費助成事業(主として人文社会科学分野、外国人研究者)	29	7	38	-	②④
	外国人特別研究員	1	0			②④
	学振特別研究員	10	2	22	3	②④
	研究開発マネジメント人材の育成・確保体制整備事業			1	0	②③④
	二国間交流事業			1	1	①②④
	日中韓フォーサイト事業			1	0	①②④
JST	ムーンショット型研究開発事業	1	1			②③④⑤⑥⑦
	共創の場形成支援プログラム	3	2			②③④⑤⑥⑦
	経済安瀬保障重要技術育成プログラム	2	0			②⑦
	研究成果最適展開支援プログラム	1	0	5	-	①②③④⑤⑥⑦
	戦略的創造研究推進事業			37	3	①②④
	創発的研究支援事業	2	0	16	-	①②④⑥⑦
NEDO	官民による若手研究者発掘支援事業			1	1	②③④
	先導研究プログラム	2	2	3	-	①②③④⑤⑥⑦
AMED	医療機器等研究成果展開事業			2	1	②③④⑤
	革新的先端研究開発支援事業			2	0	②③④
	再生・細胞医療・遺伝子治療実現加速化プログラム			1	1	②③④⑤
	次世代がん医療加速化研究事業			1	-	②③④
	循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業			1	-	②③④
JAXA	宇宙戦略基金事業	1	0	2	1	①②③④⑤⑥⑦
MEXT	オープンアクセス加速化事業	1	0			①②④
	共同利用・共同研究システム形成事業～学際領域展開ハブ形成プログラム～	1	0	1	0	②④
東北大学	SOKAP	1	1			②④
企業等	財団・企業の助成等(第一三共寄附プログラム、公益財団助成など)	2	0	4	2	①②③④
	学術指導	2	2	5	5	②③④
	共創研究所	7	6	10	9	②③④
	共同研究	10	6	13	9	②③④
	知財ライセンス	1	1	2	2	②③④

今後、これまでの知見を結集してプレアワードの支援体制をさらに強化するだけではなく、採択後の運営・研究開発・産学連携を担うポストアワード支援への道筋を作ることで、一気通貫型の支援活動を推進してまいります。

2024/2025 年度の個別の活動事例（詳細については 2.3 参照）

- ムーンショット目標9:コア領域昇格プレアワード
- 第 7 期「東北半導体タレントハブの構築」プレアワード
- 英語での科研費申請サポート
- 2025 年度科研費大区分 A の申請支援:DX 化と部局横断の連携
- 「AMED 申請書作成」セミナー開催および申請支援
- 東北大学 HFSP サイエンス・サミット 2025 の開催支援
- 観光庁事業「ユニークベニューでの国際会議ネットワーキング」開催支援

(4)プロジェクトの企画・運営支援(ポストアワード支援等)

【活動メニュー】

1. 研究プロジェクトの構想段階の支援
 - 制度設計・外部資金獲得・外部組織とのマッチング支援等
2. 研究プロジェクトの運営支援
 - プロジェクトマネジメント・各種調整等
3. 成果活用・発信支援
 - 国際連携・学際連携・産学連携・広報等

【活動概要及び主要活動例】

JST COI-NEXT や X-nics などの研究開発拠点型の大型事業は、その採択後も長期に渡って事業運営、研究開発、産学連携のマネジメント機能を要することから、URA が主体となって関連する事務局・支援組織とともに支援を行ってまいりました。URA は、運営体制の構築と運営、FA(ファンディング・エージェンシー)等との会議資料や報告書の作成、参画する研究者や企業との連携、知財や契約の調整、創出された成果や関連研究に基づく新たな外部資金獲得など多岐にわたる支援を行っています。全学担当の URA の増員とともにプレアワード支援件数が増加してきており、このような支援ノウハウの提供を通じて各研究開発拠点で雇用される URA 等の育成の役割も担うようになっていきます。

「産学連携強化部門」は、主に研究開発拠点や研究開発グループを形成する事業の支援を担っています。また、事業や拠点のニーズに適切な支援を提供すべく、「研究力強化部門」の URA もポストアワード支援を支えています。

2024/2025 年度の主要活動例

- JST 共創の場形成支援プログラム 3拠点
- 文部科学省 次世代 X-nics 半導体創生拠点形成事業 1拠点
- JST ムーンショット型研究開発事業 2プロジェクト
- 東北大学 部局、コアリサーチクラスター など

RM センターとして支援を行った主な事業とその支援内容を表 2.3に示しました。具体的な支援内容としては、運営面の支援については、①体制整備、②計画書作成、③会議体運営、④外部機関折衝、⑤報告書作成、⑥評価対応、⑦広報企画・運営が挙げられ、また、研究面の支援については、①研究企画、②進捗・予算管理、③リスク管理、④知財戦略・管理、⑤契約折衝・管理、⑥成果物帰属、⑦競争的資金等獲得、が挙げられます。

表 2.3 各事業の支援数及びその支援内容

FA 等	事業名	2024	2025	支援内容
JST	ムーンショット型研究開発事業	1	2	運営支援:①②③④⑤⑥⑦ 研究支援:②③④⑤⑥⑦
	共創の場形成支援プログラム	3	3	運営支援:①②③④⑤⑥⑦ 研究支援:①②③④⑤⑥⑦
NEDO	官民による若手研究者発掘支援事業		1	運営支援:①②③④ 研究支援:①⑤
	省エネAI半導体及びシステムに関する技術開発事業	1	1	運営支援:①②③④⑤⑥⑦ 研究支援:①②
AMED	生命科学・創薬研究支援基盤事業		1	運営支援:①②③④⑤⑥⑦ 研究支援:①④⑤
内閣府	総合知活用事例	1		運営支援:⑦
MEXT	共同利用・共同研究システム形成事業	1		研究支援:①
	次世代 X-nics 半導体創生拠点形成事業	1	1	運営支援:①②③④⑤⑥⑦ 研究支援:①②
東北大学	部局・拠点	3	2	運営支援:②③④⑤⑦
	はばたく若手支援事業	1	1	運営支援:①②③④⑤⑥⑦ 研究支援:①②⑤⑦
企業等	共創研究所・共同研究等	4	11	運営支援:①②③④⑤⑦ 研究支援:①②④⑤⑥⑦

今後も、これまでの知見を結集してポストアワードの支援体制をさらに強化するだけでなく、次の大型プロジェクトの構想を進めていくことで、新たな競争的資金獲得のためのプレアワード支援へと繋げてまいります。

2024/2025 年度の個別の活動事例（詳細については 2.3 参照）

- CMOS／スピントロニクス融合技術による AI チッププロジェクト ポストアワード支援
- COI-NEXT「ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点」のポストアワード支援
- COI-NEXT「Vision to Connect 拠点」のポストアワード支援
- はばたく若手支援事業
- 材料科学コアリサーチクラスター(CRC-MS)支援
- ムーンショット9 筒井プロジェクト特許出願支援

(5) 全学コアファシリティの強化

【活動メニュー】

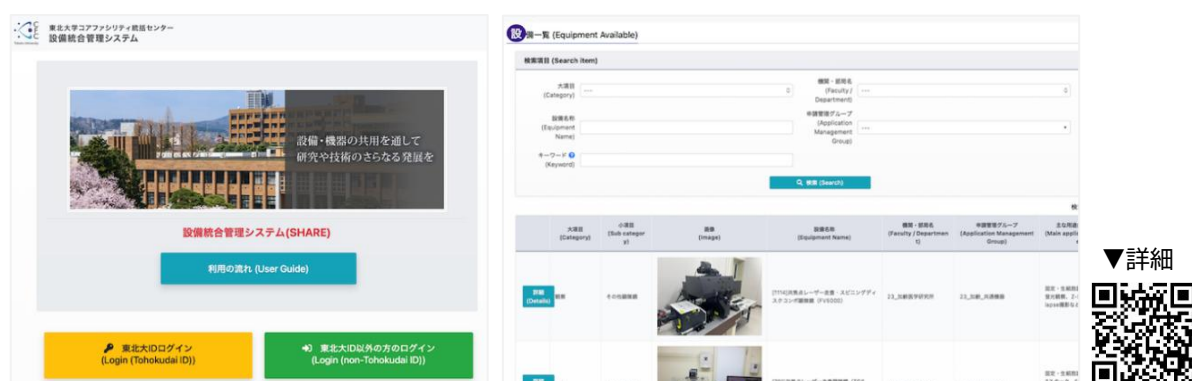
1. コアファシリティを活用した研究環境高度化施策の企画・立案
2. 全学視点でのコアファシリティの戦略的整備計画の立案
3. コアファシリティの管理運用
4. 研究者への技術支援・受託サービス提供、コンサル、分析手法等の開発

【活動概要及び主要活動例】

本学の研究環境の高度化を図るため、RM センターでは、「コアファシリティ強化部門」を中心に、全学的なコアファシリティ強化に関する各種施策の企画・立案ならびに、学内外に共用している研究設備・機器の管理・運用業務を行ってきました。本学では、さまざまな研究分野で用いる共用設備・機器が 20 以上の部局に設置されており、コアファシリティ強化部門においても、研究者の多様なニーズに応えるため、全学的な支援体制の強化に取り組んでまいりました。

2024/2025 年度の主要活動例

- 文部科学省コアファシリティ構築支援プログラムの実施
- 新たな高度研究支援人材(コアファシリティスタッフ)の整備および配置(2025 年度末時点で 4 名採用)
- 研究力強化に向けた共用設備整備(計 20 件・約 15 億円規模:順次整備中)
- 研究力強化に向けた共用設備・機器の強化・機能拡充等に関する学内研究者向けアンケート調査の実施
- 設備統合管理システム(SHARE)による共用設備利用受付・管理に関する業務 など



- ◆ 文系・理系すべての学内研究者を対象に「研究力強化に向けた『共用設備・機器』の強化・機能拡充等に関するアンケート」を実施
- ◆ 学内研究者がコアファシリティに関して求めていることを大規模調査

アンケート対象者：学内全研究者（3,773名）
 アンケート実施期間：2025年10月24日～11月7日
 アンケート回答者数：1,248名（回答率33.1%）

研究力強化に向けた『共用設備・機器』
 の強化・機能拡充等に関するアンケート
 （コアファシリティ統括センター）
 Survey on Shared Research
 Equipment and Core Facilities for
 International Research
 Excellence (Core Facility Center)

アンケートはGoogle
 フォームから回答



回答のあった1,248名中433名（約35%）の研究者が
 「詳細アンケートや意見交換会へ積極的に協力する」と
 回答があった。

⇒研究者からダイレクトに意見や要望を収集できる
 新たなルート

課題を改めて認識するとともに、今後の取組の
 優先順位付けや具体化に活用していく

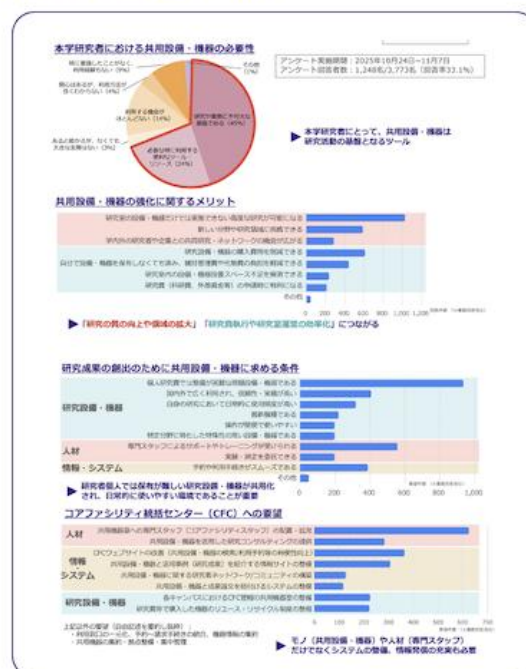


図 2.5 研究力強化に向けた共用設備・機器の強化・機能拡充等に関するアンケート調査
 （学内研究者 3,773 名を対象に 2025 年 10 月実施／回答率 33.1%）

2024/2025 年度の個別の活動事例（詳細については 2.3 参照）

- JASIS2025 でのコアファシリティ統括センターブースの出席
- 「第 15 回 MaSC 技術交流会」開催支援

(6)人材育成

【活動メニュー】

1. URA の育成・連携を促進する URA 連携協議会の運営

2. スキルアップセミナーの提供

- 論文分析ツールの活用方法
- 英語論文執筆
- 論文被引用数向上
- 英語でのプレゼンテーション
- オープンアクセス
- 知的財産

【活動概要及び主要活動例】

RM センターでは、2015 年に本学の URA の連携と育成を目的とした「URA 連携協議会」を設置し、URA 重点化スキルの策定と重点化スキル育成コースを開講することで、年間 10 回、1 回 2 名程度の講師による講義や意見交換を行ってきました。本学の URA 数が着実に増加する中、2025 年 11 月時点で 95 名に達するなど、大学での支援業務経験の少ない URA が数多く着任するようになったことから、従来の人材育成手法を見直しました。

具体的には、2025 年度から、「部局のニーズを踏まえる」「ソフトスキルも対象とする」「データリテラシーを重視する」「マインドセットを考える機会を与える」「年間の業務サイクルなどを考慮する」などして、「人材スキル開発部門」が体系的な新たな URA 人材育成プログラムを構築した上でセミナーを開講しました。

既存の研修

URA研修(JST)：全員受講

- ・JSTが提供するURA研修を受講し、基礎的な知識を習得
 - ・オンデマンドの座学
- 実施時間数：32時間＋確認テスト

URA連携協議会：全員受講

- ・2015年度より毎月継続実施
 - ・科技イノベの最新動向に関する第一人者による講演
 - ・統合イノベーション戦略、オープンサイエンス、ELSI/RRRIなど URAの人脈を活用し、内閣府、NISTEP、CRDSなどから講師を招聘
 - ・人的ネットワーク形成の機会も提供
 - ・一部学外に公開し東北大学URAの知名度向上にも資する
 - ・参加しやすさを重視しオンライン配信も実施。
- 実施時間数：年間10回実施(90分/回)
平均参加者50名(うち学外18名)

2025年度新設

スキルアップセミナー：選択受講

- ・2025年度から新任URAの増加を踏まえ、URA人材育成プログラムを新設
 - ・業務スキル向上
 - ・研究力分析手法のレベルアップ、プレアワード支援事例の共有など
 - ・ソフトスキル習得
 - ・ファシリテーション、コーチング、マインドセット確認などのワークショップ
 - ・学内部署とのネットワーキング
 - ・産連各組織、グローバル戦略室などに講師を依頼
 - ・参加者のネットワーキングも意図し会場開催
- 実施時間数：年間34回実施(90分/回)
平均参加者：30名

図 2.6 新たな URA 人材育成プログラムの新設

2024/2025 年度の個別の活動事例（詳細については 2.3 参照）

- URA 人材育成プログラムの整備
- URA スキルアップセミナーの開催
- URA 連携協議会の開催
- 星陵地区部局 URA の医療関連研究支援勉強会・意見交換会の立上げ・運営

2. 3 具体的な活動事例

2. 2において言及した個別の活動事例についてご紹介します。

事例ごとに同じフォーマットを使って1ページ単位のシートごとにまとめています。各シートの冒頭において、それぞれが、どの年度の、どの活動項目に属する活動であることを示しました。

また、それぞれの活動が URA のどのような業務に相当するかを、各シートの上部にある「URA 業務区分」で示しました。この区分は、一般社団法人リサーチ・アドミニストレーション協議会(RA 協議会)のウェブページ(<https://www.rman.jp/aboutus/>)で紹介されているものです。

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

なお、各シートの末尾には、それぞれの活動において担当 URA が特に意識した点や苦勞した点などを、「担当 URA コメント」として掲載しています。

具体的な活動事例：FY2025 研究戦略推進

研究戦略・政策動向ポータルによる情報提供

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 期間 2025 年 7 月～
- 提供先 2025 年度は研究担当理事、研究推進部、URA(2026 年度中に全学教職員への拡大を予定)
- 掲載頻度 最新動向の定点観測およびレポートの随時・定期更新
- 情報ソース 国内省庁(内閣府、文科省、経産省等)の審議会資料、海外機関(米国、EU、英国等)の科学技術政策資料、JST CRDS の報告書など



図 3.1 研究戦略・政策動向ポータルによる情報提供のフロー(OpenAI ChatGPT(GPT-5.3)にて画像作成)

■ 概要

国内外の広範な政策・研究動向を収集・分析し、執行部や研究者、URA へ情報提供する「研究戦略・政策動向ポータル」を構築し、試験運用を実施しました。生成 AI で一次情報から効率的に情報を抽出し、「Top 論点を示すサマリー」、「情報・ライフなどの分野ごとに整理したトピックス」、「出典情報」の 3 部構成の週次レポートに集約して参照できる形にしています。2025 年度の試験運用を経て、2026 年度は研究戦略・政策動向ポータルの内容を見直します。

【担当 URA コメント】



吉田 明
特任教授 首席 URA



矢田 哲也
特任講師 主任 URA



ソウ・ズバカル
特任講師 主任 URA

膨大な国内外の政策・研究動向を効率的に収集するため、生成 AI を活用した調査・統合フローを構築しました。指定期間の一次情報に基づく情報収集から、情報・ライフなどの分野ごとに整理したトピックスの抽出、インフォグラフィックスの作成までを半自動化し、業務を大幅に効率化しています。一方、生成 AI 特有の情報の誤りが生じ得ることを踏まえ、出力内容について担当 URA が必要に応じて一次情報を確認しています。研究者の外部資金獲得に向けたプロジェクト企画に直結する情報提供に努めております。(矢田)

具体的な活動事例：FY2025 研究戦略推進

本部担当 URA による多種多様な部局との対話：部局セミナーを通して

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報・安全管理	その他

- 実施期間 [対象部局との事前打ち合わせ] 2025 年 9 月～12 月
[セミナー] 2025 年 10 月～2026 年 3 月
- 共催・対象 学内 28 部局(研究科、附置研究所、センター)



図 3.2 部局セミナー開催の様子

■ 概要

本学は「国際卓越研究大学」に認定されました。これを受け、地球規模課題の解決とレジリエントな社会の実現に資する卓越した研究成果の創出、およびそれに基づく社会価値の創造をビジョンとして掲げています。このビジョンの実現に向け、研究成果をより広く発信し、多くの研究者に読まれる論文を執筆するためのノウハウなどを共有することを目的として、本セミナーを企画・開催しました。内容は、各部局の要望に即してカスタマイズした「論文インパクトを高める戦略的・実践的セミナー」となっています。各種論文指標の説明や課題のみならず、研究コミュニティの分析、AI の利用活用、個人 PR の方法、研究評価や出版倫理に関する国際動向、英語での出版意義等幅広いコンテンツを提供してきました。

【担当 URA コメント】



マーク・ハンゼン
特任准教授 上席 URA



吉田 明
特任教授 首席 URA

塩入 諭 センター長
和田 匡路 特任准教授 上席 URA
仲島 義貴 特任教授 首席 URA
荘司 弘樹 特任教授 首席 URA
川崎 能彦 特任准教授 上席 URA
矢田 哲也 特任講師 主任 URA

学術分野ごとに異なる論文執筆・投稿の文化、その多様性を肌で感じるため、学内 28 部局の執行部と対話を重ね、連携してセミナーを企画しました。面談を通じて各現場のリアルな課題を共有し、連携の土台を築くことができました。事後アンケートで浮き彫りになったのは、部局や研究者ごとに支援への期待が極めて多岐にわたるという事実です。こうした「現場の声」こそが、今後の支援を磨く鍵となります。今後は各部局の URA およびその他の関係者とのさらに緊密な「二人三脚」の連携を通して、研究者の皆様の期待に真摯に応える「個別の伴走型支援」の実現に向けて邁進します。全学的な支援組織である RM センターの機能や支援内容を周知する良い機会にもなりました。(ハンゼン)

具体的な活動事例：FY2025 研究戦略推進

情報基盤整備：研究活動の見える化とデータのキュレーション

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

■ 期間 2025 年～

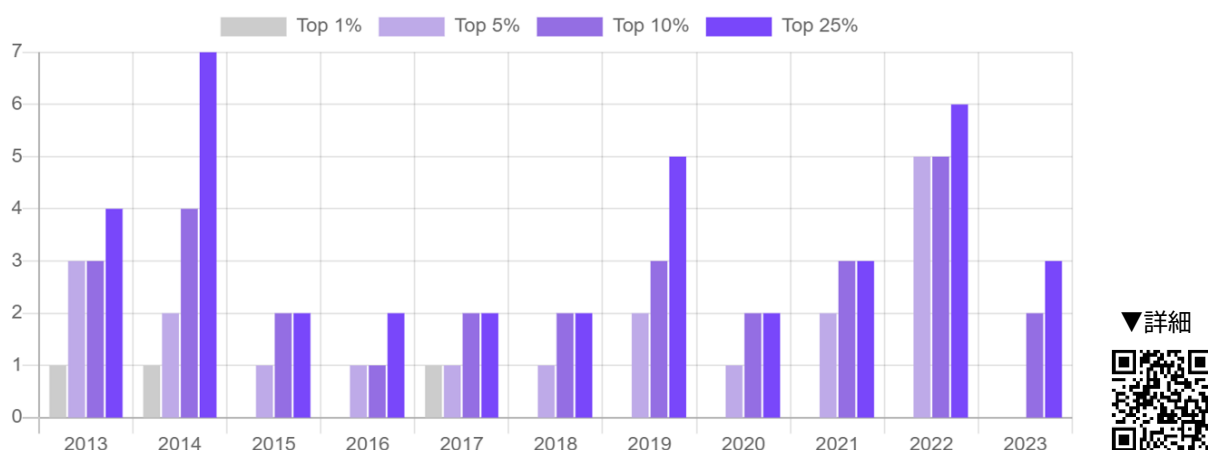


図 3.3 トップパーセンタイル・ジャーナル掲載論文

■ 概要

文部科学省の研究大学強化促進事業以来、RM センターは書誌情報関連のデータベースおよび解析ツールを導入し、維持管理、啓発活動を行ってきました。組織や技術の変化を受け、現状に合わせた情報基盤の見直しを実施し、その結果、2025 年度に東北大学スカラーを終了することになりました。情報基盤の統一や利便性の向上のほか、予算の最適化も一つの目的でした。また、EBPM やロジックモデルのような概念を背景に、現在も書誌情報に基づくモニタリングや報告が求められています。学内関係者の負担を減らし、尚且つ、可能な限り正しいデータを提供することによって、健全な IR 体制の構築に URA が大きく貢献しています。関連部署と協力し、データの集計可視化、解釈、課題等について議論を行い、既存の学内インフラそのものやアクセス方法の改善について URA 目線および研究者目線の双方からアドバイスをさせていただいています。

【担当 URA コメント】



マーク・ハンゼン
特任准教授 上席 URA



川崎 能彦
特任准教授 上席 URA

本学の情報基盤には様々なデータソース、ツール、ステークホルダーが関わっています。ニーズも多種多様で、アクションに落とし込むための人材がまだ十分に育っていません。データリテラシーに加え、インパクトリテラシーやデータストーリーテリングのようなスキルが求められています。また、特定の民間企業がデータ提供者になっていることもあり、リスクマネジメントの観点と世界的なオープンインフラの動向への対応が求められます。このようなデータは IR のみならず、情報発信や研究推進にも有用なものです。AI への対応や情報基盤を支える人材への投資不足は今後の課題です。(ハンゼン)

具体的な活動事例：FY2024-2025 研究戦略推進 内閣府上席科学技術政策フェローとしての活動

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 受入期間 2014 年度～
- 受入先 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局



図 3.4 内閣府と東北大学が共催したシンポジウムで
モデレータとして登壇する稲穂フェロー



図 3.5 内閣府の主催する総合知ワークショップで
慶應義塾大学の教員らと議論する稲穂フェロー

■ 概要

内閣府科学技術・イノベーション推進事務局では、大学・研究機関の研究者等の現場における専門的知見等を政策立案過程に活かすべく、大学・研究機関の研究者等が内閣府にて科学技術・イノベーションに関する専門的事項の調査・分析、科学技術政策の企画立案等の業務に参画する「科学技術政策フェロー制度」を設けています。本学は当初から URA が派遣対象となっており、現在のフェローである稲穂健市は 2023 年度より勤務しており、政府と本学とを結ぶ役割を担っています。

【担当 URA コメント】



稲穂 健市
特任教授 首席 URA

科学技術・イノベーション推進事務局では、第 7 期科学技術・イノベーション基本計画、総合知、オープンアクセス、AI for Science などに関連する政策の企画立案に関わってきました。専門領域である知財分野の知見提供のほか、高い文章能力が評価され、政策文書の素案作成や校正などを行っています。利益相反にならない範囲内で政策動向の把握・共有を進めてきたほか、内閣府で培った広い人脈を活かして、政府関係者を本学のイベントなどに招聘したり、政府と本学との共同シンポジウムの開催をアレンジしたりしました。次世代を担う URA にもフェロー業務にチャレンジしていただきたいです。(稲穂)

具体的な活動事例：FY2024-2025 研究戦略推進

「東北大学知財セミナー」開催支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 主催 東北大学産学連携機構
- 後援 工業所有権情報・研修館(INPIT)
- 実施期間 通年(おおよそ月 1 回)
- 開催形態 オンライン・1 回 90 分



図 3.6 2024 年度の東北大学知財セミナーでのオンライン登壇の様子

■ 概要

本セミナーは、主に東北地方の学生・教員、企業の経営者・技術者、弁護士・弁理士・知財担当者といった専門家等の間で知財情報を共有し、知財に関するネットワーク構築の礎をつくることを目的としたものです。知財に関する基本的内容から先端的な法的問題まで、企業や大学の知財戦略にかかわる幅広い情報を提供しています。URA としては、産学連携機構および法学研究科と連携しながら、プログラム設計の助言をしたり、実際に登壇したりしています。

【担当 URA コメント】



稲穂 健市
特任教授 首席 URA

登壇者や演題などプログラム設計の助言をしているほか、「〇〇年度の知財関連ニュースから学ぶ知財の最前線」という演題で毎年登壇もしています。2024 年度の小職が担当したセミナーでは、過去最高の 767 名の方々にご登録いただきました。誰もが興味のある題材を探すこと、興味のある設計とすることのほか、特に AI などの技術進歩や国際情勢など変化の激しい現代社会においては、普段の業務に限定されない包括的な知識の習得とその伝授が大切であると強く感じます。お陰様で毎年盛況となっており、本学 URA のプレゼンス向上にも大きく貢献しています。(稲穂)

具体的な活動事例：FY2025 研究戦略推進

「全国キャラバン 3QUESTIONS 東北地区編」の開催運営支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 会期 2025 年 8 月 23～27 日
- プロジェクト支援期間 約 4 か月
- 会場 東北大学青葉山新キャンパス・青葉山コモンズ
- 主催 公益財団法人国際高等研究所
- 共催 東北大学(会場提供)、秋田大学、仙台大学、東北学院大学、弘前大学、福島大学、山形大学
- 後援 岩手大学、日本経済新聞イベント企画ユニット

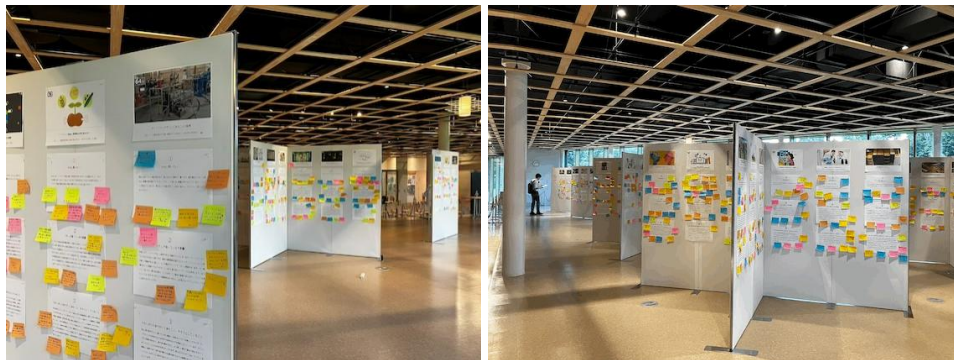


図 3.7 3QUESTIONS 開催の様子

▼詳細



■ 概要

「全国キャラバン 3QUESTIONS」は、研究者が匿名で「3つの問い」をポスター発表するユニークな対話型イベントです。参加者は所属や肩書きを隠し、分野の垣根を越えて純粋に「問い」の内容で対話する学際的な場であり、先入観を排し、研究の「本質」や「学際共創」を目指すのが狙いです。会期中は、東北地域の各大学の研究者や学生から 85 件のポスター発表があり、一般の来場者も多数訪れました。

【担当 URA コメント】



堀野 秀幸
特任教授 首席 URA



川崎 能彦
特任准教授 上席 URA

蔭山 麻里子 特任教授 首席 URA
マーク・ハンゼン 特任准教授 上席 URA
ジェイソン・サンダーソン 特任講師 主任 URA

青葉山コモンズ 1 階のラーニングコモンズで開催された本イベントには、会期中に研究者や URA など延べ 230 名が参加しました。会場では、来場者が熱心にポスターを読み歩きコメントを付する姿が見られ、関心の高さがうかがえました。ポスター発表の合間を縫って開かれたグループセッションでは、多様なテーマのもと参加者の間で活発な意見交換が行われ、26 日に開かれた企業人と研究者による「50 夜会」では、皆さん和気あいあいと交流する姿が印象的でした。全日を通して参加した皆さんから非常に好評で、次回開催への期待を込めつつ会期を終えました。国際高等研究所の宮野先生や渡辺先生、そして仙台大学など他機関の方々と一緒に運営できたこともよい刺激となりました。(堀野)

具体的な活動事例：FY2025 研究戦略推進

第 11 回人文・社会科学系研究推進フォーラムの開催

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報・安全管理	その他

- 会期 2026 年 3 月 5-6 日
- 会場 片平キャンパスさくらホール
- 共催 人文・社会科学系 URA ネットワーク



▼詳細



図 3.8 初日シンポジウム(左)と 2 日目のワークショップの様子

■ 概要

本フォーラム「問うことから始まる価値創造——人文・社会科学が導く仕掛け、ワクワク、そして責任」を主催しました。人文・社会科学系研究の推進および研究支援等に係る情報交換を目的として、人文・社会科学系 URA ネットワーク(通称 JINSHA ネットワーク)の幹事校が持ち回りで開催している定例イベントです。初日シンポジウムは、計 7 名のゲスト・スピーカーによる講演およびパネルディスカッションにより構成されました。2 日目に URA 並びに民間企業の研究開発・産学連携担当向けのワークショップを実施しました。参加者数はシンポジウム計 177 名(オンライン参加者含む)、ワークショップ計 43 名でした。

【担当 URA コメント】



野澤 俊太郎
特任准教授 上席 URA



臼澤 基紀
特任准教授 上席 URA

蔭山 麻里子 特任教授 首席 URA
松原 雄介 特任准教授 上席 URA
清水 一徳 特任准教授 上席 URA

社会課題解決や産学連携等の文脈から人文・社会科学系研究の価値が浮かび上がるようなテーマ設定を心掛けました。また、登壇者選定においては、専門や業種等の多様性を意識しました。

一般の方々にもご参加いただけるよう、パンフレットのデザインから登壇者の服装(ドレスコードなし)に至るまで細部にこだわりました。

意識的に部局等 URA を巻き込みました。大森由理特任助教(研究コンプライアンス推進室)、中野惟文特任助教(統合日本学センター)、石井花織特任助教(東北アジア研究センター)に、それぞれ司会進行、配信担当、写真撮影といった核となる業務をご担当いただきました。(野澤)

具体的な活動事例：FY2025 オープンサイエンス／DX 推進

オープンサイエンスセミナー「AI for Science を考える」の企画運営

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 会期 2026 年 2-3 月・計 2 回
- 会場 片平キャンパスさくらホール



図 3.9 「AI for Science を考える」のポスター

■ 概要

オープンサイエンス部門では、本学が推進する「オープンサイエンス」の更なる展開に資する活動を本年度の目標のひとつとして掲げています。この取り組みとして、学内外の研究者・URA・職員を対象とした「オープンサイエンスセミナー」を企画・運営しました。とりわけ、近年急速に注目を集める「AI for Science」をテーマに設定し、2026 年 2 月および 3 月の 2 回にわたりセミナーを開催しました。

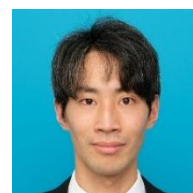
【担当 URA コメント】



菅原 良
特任教授 首席 URA



ソウ・ブバカル
特任助教 URA



中島 功雄
特任助教 URA

「AI for Science」という今日的かつ学際的テーマを設定し、第一線の研究者を招聘することで、本学 RM センターの取り組みを学内外に広く発信しました。

AI 研究者と本学の言語 AI 研究センター、各分野研究者との対話の機会を創出し、学内における異分野連携の素地を形成しました。

現地＋オンラインのハイブリッド形式により、学内研究者・URA・職員のみならず学外関係者の参加を可能とし、本学のオープンサイエンス推進を実質化しました。

本シリーズを継続し、テーマを「AI for Science による科学研究革新プログラム」AI for Science 環境下における「研究倫理」「研究公正」「研究データ管理」等へ拡張するとともに、若手研究者・大学院生の参画を促す双方向型セミナーへと発展させます。(菅原)

具体的な活動事例：FY2024 競争的資金等の獲得
ムーンショット目標9：コア領域昇格プレアワード
【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 事業名称 内閣府ムーンショット型研究開発事業 目標9
- プロジェクト期間 2021 年(領域研究採択)～2031 年(ステージゲート審査等により変動)
- 助成機関 科学技術振興機構(JST)

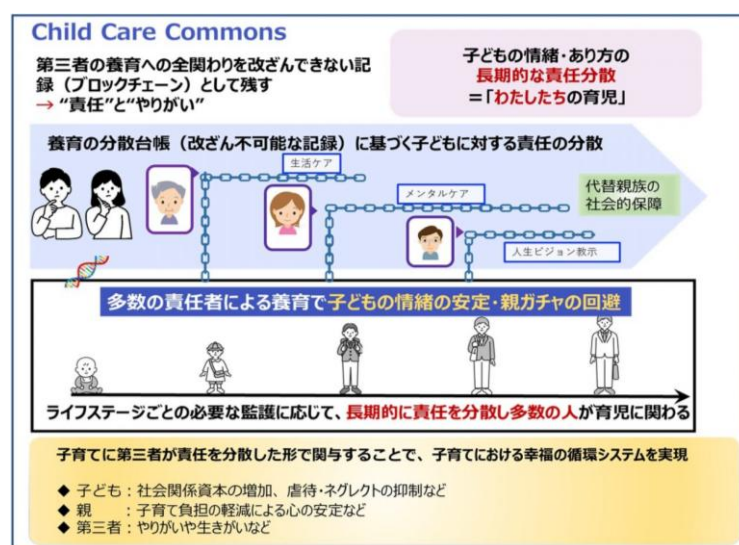


図 3.10 ムーンショット型研究開発事業目標9の概要

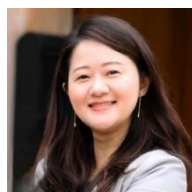
- 概要
情報科学研究科 細田准教授「Child Care Commons」プロジェクトは、主養育者に偏りがちな子育ての責任や負担を社会全体で担う「わたしたちの子育て」の実現を目指すものです。多様な人々が柔軟に関わる仕組みを提案し、親・子ども・非血縁者の心の安らぎや活力を増大させることが目標です。

2024 年度コア研究への昇格に向け、URA はプロジェクトの目指す社会像や研究開発計画の論理的な整合性を高めるための文書作成支援や、申請書全体のとりまとめを実施しました。

【担当 URA コメント】



松原 雄介
特任准教授 上席 URA



森 綾香
特任准教授 上席 URA

すでに進行していた研究プロジェクトの継続・拡大に向けた支援要請であったため、これまでの実績、研究体制、課題等を丁寧に把握することからはじめました。

関連する社会課題およびそれらの解決による効果等を整理する一連の作業においては、研究者の「壁打ち相手」となることで、より体系的な整理が図られたものと感じています。

URA2 名のチームによる支援は効果的であったと思います。URA 同士で上記作業に係る議論を重ねることができた他、研究者へのコミュニケーションの仕方等についても十分な検討を行うことができました。(松原)

具体的な活動事例：FY2024-2025 競争的資金等の獲得

第 7 期「東北半導体タレントハブの構築」プレアワード

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 事業名 成長分野を支える半導体人材の育成拠点の形成(enSET)
- 期間 2025-2029 年度
- 事業責任者 半導体クリエイティビティハブ・ハブ長・戸津健太郎
- 協力機関 八戸工業高等専門学校、一関工業高等専門学校、仙台高等専門学校、秋田工業高等専門学校、鶴岡工業高等専門学校、福島工業高等専門学校、東北半導体・エレクトロニクスデザインコンソーシアム
- 助成機関 文部科学省

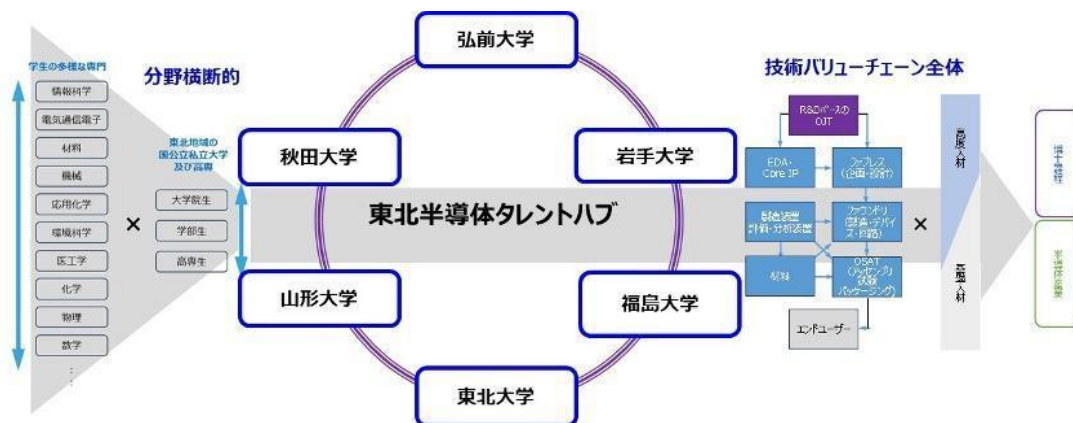


図 3.11 東北半導体タレントハブの概要

■ 概要

東北地域は半導体関連分野の製造品出荷額が約 17.2%を占め、従業員数も約 2.5 万人を擁する重要な半導体生産拠点となっています。しかし、今後 10 年で 6000 人もの深刻な人材不足が危ぶまれています。半導体産業人材不足解消のために、本提案事業では、東北大学を拠点校として東北地域の主要大学(弘前大学、岩手大学、秋田大学、山形大学、福島大学)と連携し、半導体技術バリューチェーン全体を俯瞰できる人材の育成を目指しています。

【担当 URA コメント】



庄司 弘樹
特任教授 首席 URA

東北大学では半導体分野の研究及び人材育成を進めるための取り組みを行ってまいりました。東北大学は地域の半導体人材不足解消を目指し、東北各大学の研究者を結ぶ包括的な教育プログラムの構築を推進しています。本事業の提案に際しては、学内外の複数部署や各大学と連携し、研究シーズや教育ニーズの集約・調整に尽力しました。普段の研究支援とは異なる「教育」という領域への挑戦は、私自身にとっても学びが多く、東北の半導体産業が持つ高いポテンシャルを再認識する貴重な機会となりました。(庄司)

具体的な活動事例：FY2024-2025 競争的資金等の獲得 英語での科研費申請サポート

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- ターゲット 国際研究者
- 支援タイプ 対面及びオンライン



図 3.12 2025 年度 English Kakenhi Website

■ 概要

RM センターは、研究者が日本政府からの研究資金を獲得できるよう支援を行っています。本プロジェクトは、特に英語で「科研費」の申請を行う研究者を対象としています。当センターでは、研究資金支援に関するあらゆる必要な情報を研究者が迅速に得られるよう、一元的な情報源となる包括的なウェブサイト(English Kakenhi Website)を構築しました。このプラットフォームを通じて、研究者は「常時対応」の英語ヘルプデスクを利用して、科研費やその他の助成金に関する問い合わせを行うほか、英語を話す URA との個別相談を依頼したり、並行申請の適格性を評価するオンラインツールを活用したりすることができます。

【担当 URA コメント】



ジェイソン・サンダーソン
特任講師 主任 URA

科研費の申請プロセスの具体的、かつ時に困難を伴う複雑な点を理解していることに加えて、科研費の支援において最も効果的なアプローチの一つは、研究者本人とその経歴について徹底的に理解を深めることであると私は考えています。こうした信頼関係を築くことで、申請書に必要な改善点について率直かつ建設的な議論が可能になります。この戦略の有効性は、2025 年度に支援したすべての種類の科研費申請の採択率が 45%であったことから明らかです。科研費の支援において常に最大の課題の一つとなるのは、修正依頼の量が膨大であることです。そのため、2026 年度は例年より数ヶ月早く科研費の支援を開始することになります。(サンダーソン)

具体的な活動事例：FY2025 競争的資金等の獲得

2025 年度科研費大区分 A の申請支援：DX 化と部局横断の連携

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報・安全管理	その他

- 支援期間 2025 年 7 月 1 日～ 8 月 8 日
- 対象 審査区分を大区分 A で申請予定であり、次のいずれかの条件を満たす研究者
 - ・ 学位取得後 8 年未満
 - ・ 科研費への申請実績がない
 - ・ 現在、科研費を持っていない
 - ・ 今年度で科研費が終わる

表 3.1 2025 年度支援実績一覧

部局	支援回数		研究者数	
	相談会	相談会後	相談会	相談会後
文学部・文学研究科	7	2	5	2
教育学部・教育学研究科	5	0	4	0
法学部・法学研究科	1	12	1	7
経済学部・経済学研究科	1	0	1	0
国際文化研究科	5	0	3	0
東北アジア研究センター	0	0	0	0
高度教養教育・学生支援機構	4	3	2	1
統合日本学センター	0	3	0	1
その他	0	0	0	0
合計	23	20	16	11

▼詳細



■ 概要

2025 年度科研費大区分 A の申請支援では、文系分野出身の URA9 名が部局を越えて連携し、研究者に対する多角的なフィードバックを実現しました。さらに予約システムの DX 化により、利便性と情報共有の効率を大幅に向上させました。7 月から 8 月の相談会を中心に、延べ 23 名に対し 43 回の支援を実施しました。組織横断的な協力体制とデジタル活用という新たな試みを通じ、質の高い研究計画調書作成を強力に後押ししました。部局からは、石田真特任助教(法学研究科)、澁谷秋特任助教(情報科学研究科)、AI YU 特任助教(情報科学研究科)、土井幹裕特任助教(統合日本学センター)、中野惟文特任助教(統合日本学センター)、楊妍特任助教(東北アジア研究センター)の計 6 名が本支援業務に従事しました。

【担当 URA コメント】



境野 飛鳥
特任講師 主任 URA



中島 功雄
特任助教 URA

白澤 基紀 特任准教授 上席 URA
野澤 俊太郎 特任准教授 上席 URA
他部局等 URA6 名

2025 年度は運営体制を抜本的に見直し、業務の DX 化を図りました。具体的には、リサーチ・マネジメントセンターのオープンサイエンス推進部門と連携し、GAS を用いた予約・データ管理システムを構築したことによって、手作業によるメール対応や研究者ごとの共有フォルダ作成を自動化し、大幅な業務の効率化を実現しました。また、部局固有の事情や担当 URA の執務条件を考慮した個別シフトを編成し、柔軟な連携体制を構築したことで、組織の垣根を越えつつ、無理のない協力体制を整えることができました。(境野)

具体的な活動事例：FY2025 競争的資金等の獲得 「AMED 申請書作成」セミナー開催および申請支援 【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- セミナー会期 2025 年 11 月 11 日
- 支援期間 2025 年 11 月～

2025年11月11日
SiRIUS セミナー

AMEDの申請書の書き方

リサーチマネジメントセンター
首席URA
村田昭子

本日の内容

1. URAおよび自己紹介
2. 競争的資金獲得の申請書作成
3. AMEDの事業
4. 研究開発提案書作成のポイント
5. AMED申請の意義

AMED一次審査（事前絞り込み）ポイント1

1. 研究の意義・目的
(1) 研究の意義（1000文字以内）
1000文字以内で、研究開発の意義（研究開発開始前までに達成しようとする研究開発成果の意義）、研究開発の必要性（社会実用化の観点から）を具体的に説明してください。また、研究開発の意義・目的の達成（研究開発の意義）を達成するための具体的な計画（研究開発の計画）を具体的に説明してください。

(2) 意義
国内外の最先端研究でどこまで進んでいるか、どのような成果が得られているかを簡潔に説明してください。

研究開発の意義のふたつまでの説明を簡潔に、研究開発の意義に基いた研究について説明してください。本研究開発の意義・目的を簡潔に説明し、研究開発の意義・目的の達成（研究開発の意義）を達成するための具体的な計画（研究開発の計画）を具体的に説明してください。

- ・本文中は同一ワード（同一文章）を用いる。
- ・背景→「本研究目的」→「アウトカム」が一目でわかる図が望ましい。
- ・「本研究開発」目的の部分も明確に。

図 3.13 「AMED 申請書作成」セミナーの資料

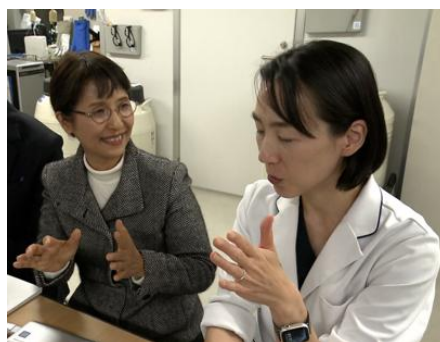


図 3.14 NHK「クローズアップ現代」ノーベル賞日本人ダブル受賞へ 研究の最前線は？課題は？
2025/12/10 放送（画像提供：NHK）

■ 概要

医学イノベーション研究所(SiRIUS)内の研究者・URA 向けに AMED 申請セミナーを開催し、「AMED 申請書の書き方」について講演しました。この取り組みを契機として AMED 申請支援を実施し、その活動が NHK の取材につながり、「クローズアップ現代」で放映・紹介されました。その後も AMED 申請書作成、ヒアリング審査対策の支援を複数件実施しました。藤沢詩織特任助教(SiRIUS)、関口雄介特任講師(歯学研究科)、大堀悠美特任助教(歯学研究科)、鈴木薫特任助教(歯学研究科)と共同で推進しました。

【担当 URA コメント】



村田 昭子
特任教授 首席 URA

他部局等 URA4 名

AMED 申請書に特化した留意点の解説に加え、申請書全般に通用する「審査観点からの書き方の要点」について講演しました。併せて、申請書作成段階で有用な TPP(Target Product Profile)の作成を推進し、内容の具体化・整合性に関して助言しました。さらに、ヒアリング審査対策としては、薬事対応について CRIETO と連携した支援体制を構築するとともに、URA 主導の模擬ヒアリングを実施し、事前質問対応、プレゼンスライド作成、質疑応答対応の各面で改善につなげました。(村田)

具体的な活動事例：FY2025 競争的資金等の獲得 東北大学 HFSP サイエンス・サミット 2025 の開催支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 会期 2025 年 10 月 1 日
- 会場 東北大学青葉山コモンズ・災害科学国際研究所
- 支援期間 約半年
- 共催 文部科学省、経済産業省、日本医療研究開発機構



▼詳細



図 3.15 「サイエンス・サミット 2025」の様子

■ 概要

ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム(HFSP)の東北大学サテライトイベント「サイエンス・サミット 2025」を開催しました。午前のワークショップと午後の講演会の2本立てのプログラム内容で、企画運営において URA チームが中心的な役割を果たしました。欧米からノーベル賞受賞者の 3 名を含む 6 名の特別講演者と HFSP 本部スタッフを迎えた豪華イベントであり、青葉山キャンパスの会場とオンラインあわせて約 160 名が参加しました。

【担当 URA コメント】



蔭山 麻里子
特任教授 首席 URA



堀野 秀幸
特任教授 首席 URA

川崎 能彦 特任准教授 上席 URA
 マーク・ハンゼン 特任准教授 上席 URA
 松原 雄介 特任准教授 上席 URA
 ジェイソン・サンダーソン 特任講師 主任 URA
 他部局等 URA6 名

RM センターを含む研究推進・支援機構に所属する事務職員や URA が多数参画し、さらに国際連携に熱心な各部局に所属の URA の協力も得て、企画段階から当日の運営まで部署横断的なプロジェクトチーム体制で支援することができました。

登壇者を囲んだ若手研究者主導のワークショップ形式を採用するなど、巡回他会場とは異なる本学独自の工夫を取り入れた点が功を奏し、サミットを盛り上げることができました。

本イベントの本来の趣旨である HFSP 研究グラントへの応募者数増加と獲得実績に今後つなげていくため、プレアワード支援体制を一層充実させていくことが課題です。(蔭山)

具体的な活動事例：FY2025 競争的資金等の獲得

観光庁事業「ユニークベニューでの国際会議ネットワーキング」開催支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 会期 2025 年 11 月 26 日
- 主催 仙台コンベンションビューロー
- 支援期間 約 3 ヶ月
- 後援 東北大学、仙台市、仙臺緑彩館
- 会場 仙臺緑彩館・仙台市博物館



▼詳細



図 3.16 「ユニークベニューでの国際会議ネットワーキング」の様子

■ 概要

若手研究者の国際頭脳循環や地域連携の活性化を目的として、仙台コンベンションビューローと連携し、国際会議の誘致・開催に係るプレアワード支援の体制作りを始動しました。その第一弾として、観光庁事業「将来の国際会議主催者育成のための地域・大学連携等促進事業」の一環で、ネットワーキングイベントの開催を後方支援しました。並行して各キャンパスで実施されたコンベンション開催支援説明会＆個別相談会、国際会議誘致開催力向上コンサルテーションについても全面協力しました。

【担当 URA コメント】



蔭山 麻里子
特任教授 首席 URA



堀野 秀幸
特任教授 首席 URA

仙臺緑彩館と仙台市博物館をユニークベニューとして開催した本イベントには、本学の研究者と URA が半数を占める約 100 名が参加し、レセプション会場を模した雰囲気の中で、仙台で国際会議を開催する機運を醸成することができました。

本学における成功事例に加え、観光庁・日本政府観光局(JNTO)や観光関連企業からも、会議の誘致に有益なリソースや開催支援メニューが主催予定者に向けて紹介されました。

JNTO の MICE アンバサダープログラムに本学から 8 人目のアンバサダーとして大隅典子教授を推薦し就任が決定したことも、会議開催の URA 支援体制の充実に向けたはずみとなりそうです。(蔭山)

具体的な活動事例：FY2024 プロジェクトの企画・運営

CMOS／スピントロニクス融合技術による AI チッププロジェクト ポストアワード支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 事業期間 2022-2024 年度
- プロジェクト主宰者 羽生貴弘教授(電気通信研究所)
- プロジェクト参加機関 東北大学電気通信研究所、日本電気株式会社、株式会社アイシン
- 助成機関 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)



図 3.17 CMOS／スピントロニクス融合技術による AI チッププロジェクト

■ 概要

AI や 5G の普及でデータ量が激増する中、電力やサイズに制約のある「エッジ領域」に適したデバイスの実現が急務となっています。本研究では、電力効率 10 倍の向上が見込まれる CMOS とスピントロニクスを融合した技術を用いて、エッジ環境に特化した AI 処理半導体の開発が行われました。産業的な応用を加速化すべく、AI チップ設計の効率化から実証・応用技術に至るまで一体的な研究を進め、厳しい制約下でも高度な情報処理を可能にする次世代デバイス基盤の構築を目指しました。

【担当 URA コメント】



庄司 弘樹
特任教授 首席 URA

本プロジェクトでは、従来比 10 倍以上の電力効率を誇るエッジ向け AI 半導体の開発に成功し、社会実装を大きく前進させました。この成果を広く発信するため、CEATEC への出展や積極的な広報活動を展開しました。その結果、CEATEC AWARD 2024 にて CEATEC AWARD 2024 ネクストジェネレーション部門賞(受賞者:東北大学、NEC、アイシン)を受賞したほか、ブースは連日多くの来場者で賑わうなど、本学の強みであるスピントロニクス技術の有用性と社会的な期待の高さを改めて認識しました。(庄司)

具体的な活動事例：FY2024-2025 プロジェクトの企画・運営

COI-NEXT「ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点」の ポストアワード支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 事業期間
2022-2023 年度、2024-2033 年度
- プロジェクト主宰者
近藤倫生教授(生命科学研究科)
- 参加機関
東北大学、MS&AD、
ジャパブルーエコノミー技術研究組合、
アマタ HD、日本郵船、
神奈川県環境センター、
南三陸町自然環境活用センター 他
- 助成機関
科学技術振興機構(JST)



■ 概要

2022 年度に COI-NEXT 育成型に採択され、2024 年度には本格型に昇格しました。「ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点」は、誰もが生物多様性の価値を認め、自然の恩恵を楽しみ、そして自然と社会が共に発展するための行動を、誇りを持って選択できる社会の実現を目指すプロジェクトです。ネイチャーポジティブ(NP)の評価の基礎理論と情報基盤の構築、地域での NP に関する人と自然の共生モデルの構築、NP 人材の育成を重点目標として、研究開発と社会実装を進めています。東北大学を幹事機関として、大学・研究機関、企業・法人、自治体等の多様な産学官ステークホルダーとともに、ターゲットに関する取組を進めています。

【担当 URA コメント】



佐藤 準
特任教授 首席 URA

他部局等 URA3 名

本プロジェクトのプレアワード支援では、前 COI での支援経験を活かしつつ、2022 年度提案と 2024 年度本格型昇格において、企画立案、提案書、ヒアリング対応、参画機関との契約、大学としての位置づけの調整などを支援しました。また、採択後のポストアワード支援では、拠点運営体制の企画、新規雇用の URA 等の支援者への教育・助言、年度ごとの評価対応、産学連携活動の助言・折衝などの外部資金獲得支援の役割も担っています。現在の充実した体制の中で、様々な役割の研究者や支援者とともに事業推進とビジョンの達成に向けて連携しており、2026 年に始動した Nature Positive Innovation Base(NPIB Global Connect Hub 5F @片平キャンパス)に定期滞在し、継続的な支援を行っています。(佐藤)

具体的な活動事例：FY2024-2025 プロジェクトの企画・運営

COI-NEXT「Vision to Connect 拠点」のポストアワード支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 事業期間 2022-2031 年度
- プロジェクト主宰者 中澤徹教授(医学系研究科)
- 参加機関 東北大学、第一生命、ロート製薬、ノバルティスファーマ 他
- 助成機関 科学技術振興機構(JST)



図 3.19 COI-NEXT「Vision to Connect 拠点」の概要

■ 概要

「みえる」からはじまるエンパワーメントを独自の戦略として、学際的なアプローチでグローバルな社会課題を解決しようとするプロジェクトです。社会変革を促進すべく、「情報格差ゼロ社会の設計」「『みらいをなおすヘルスケア』の確立」「自己実現とコミュニケーション変革」の各ターゲットに向けた4つの研究開発課題を推進しています。URA は体制整備や新規雇用者のメンタリング、企業との橋渡しを通じた BUB 連携体制の構築等を支援しました。

【担当 URA コメント】



稲穂 健市
特任教授 首席 URA



松原 雄介
特任准教授 上席 URA

URA として前 COI での経験を活かしつつ、プレアワード支援とその後のポストアワード支援を担当してきました。ポストアワード移行後は、新規の URA ほかマネジメント人材・支援職員を新たに雇用し、メンターとして教育・助言するなどの役割を果たしたり、社会実装に向けての BUB 連携モデルの構築を支援したりしました。ポストアワードを担える人材の育成や体制整備にも大きく関わりました。属人的になりがちな URA の業務をどのような形で組織として承継していけるかという点も大きなテーマとしてプロジェクト支援に取り組みました。(稲穂)

具体的な活動事例：FY2024-2025 プロジェクトの企画・運営

はばたく若手支援事業

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報・安全管理	その他

- 事業期間 2022-2031 年度
- 助成機関 第一三共株式会社 はばたく次世代応援寄付プログラム 2023 年度採択
- プロジェクト期間 [第一回公募分支援期間] 2024 年 9 月 1 日～2025 年 8 月 31 日
[第二回公募分支援期間] 2025 年 8 月 1 日～2026 年 7 月 30 日



図 3.20 はばたく若手支援事業の概要

■ 概要

2024 年度より若手研究者の躍進を支える新たな学内事業の一つとして、「はばたく若手支援事業」を実施しました。本事業は、全ての分野の東北大学の若手研究者を対象とし、その独創的な研究活動のみならず、新たな研究領域の開拓や融合研究の創出に資するネットワーキングについても支援を行うものです。本事業の特色は、研究支援者である URA が若手研究者に伴走し、外部資金の獲得等を含めて様々なニーズに寄り添い、さらなる研究の発展を支えていく点となっています。

【担当 URA コメント】



松原 雄介
特任准教授 上席 URA



堀野 秀幸
特任教授 首席 URA

坂園 聡美 特任准教授 上席 URA
白澤 基紀 特任准教授 上席 URA
千葉 俊樹 特任准教授 上席 URA
川崎 能彦 特任准教授 上席 URA
清水 一徳 特任准教授 上席 URA
ジェイソン・サンダーソン 特任講師 主任 URA
他部局等 URA2 名

RM センターの URA が、全学的に若手研究者支援に向けた学内ファンドの立ち上げから運用までを行う初めての事業となりました。本部と部局 URA とで企画運用を担うチームを組成し、公募事業の内容と進め方から書面審査などを実施しました。採択者の決定後は、伴走支援を行い、URA で共有しながら支援対応を複数人で担当するなど「面的支援」を提供しました。また、不採択であっても希望者には可能な限り支援を提供しました。分野を問わず、多くの若手研究者から応募をいただきました。好評なお声をいただき、今後の若手研究者支援内容の充実に繋がりたいと思います。（松原）

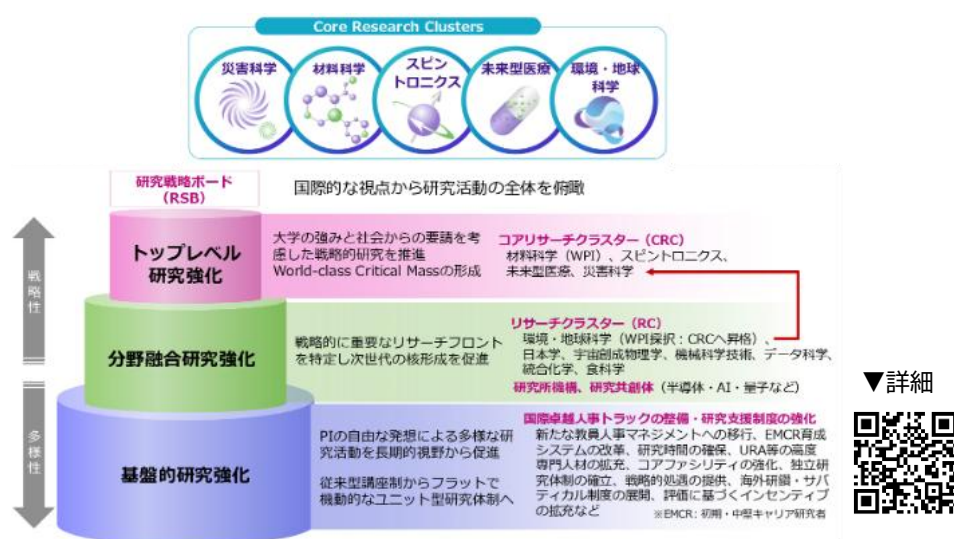
具体的な活動事例：FY2024-2025 プロジェクトの企画・運営

材料科学コアリサーチクラスター(CRC-MS)支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 支援期間 2022 年度～
- 共同で実施した他部局 URA 貞許礼子 特任准教授 上席 URA
(支援開始時は AIMR、2025 年 11 月より生命科学研究科)



■ 概要

東北大学が文部科学省より指定国立大学として指定を受ける際に、研究の柱として研究イノベーションシステムを構築し、なかでも本学が特に強みを有する 4 分野の拠点(材料科学、スピントロニクス、未来型医療、災害科学、現在は環境・地球科学を加えた 5 分野)を高等研究機構に設置しました。材料科学コアリサーチクラスター(Core Research Cluster for Materials Science)はそのうちの一つであり URA が運営等の支援を担っています。

【担当 URA コメント】



松原 雄介
特任准教授 上席 URA

CRC-MS は、東北大学内の材料科学者のプラットフォームとしての役割を担っています。URA はそのなかで、毎年開催する海外研究機関との学術交流を拡充するための国際シンポジウムの企画・運用や、国際公募により選ばれた若手独立教員による先鋭的な材料研究の展開支援などを行っております。2023 年度からは、社会連携・産学連携を加速するため、産学連携フォーラムも開始しています。2025 年度は、共創研究所設置や共創研究所間の連携拡大に向けた企画を行いました。学内研究者の交流、若手研究者育成、国際連携や産学連携など様々な活動を URA が実施しております。(松原)

具体的な活動事例：FY2025 プロジェクトの企画・運営 ムーンショット9 筒井プロジェクト特許出願支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報・安全管理	その他

■ 支援期間 2025 年 6 月～



図 3.22 多様なこころを脳と身体性機能に基づいてつなぐ「自在ホンヤク機」

■ 概要

ムーンショット 9 筒井プロジェクトにおいて、産学連携に関する会議の企画・開催・運営を担当し、議論内容を整理しました。また、知財面では URA による簡易先行技術調査の結果を基に知財部門と協議し、プロジェクトの研究範囲を提示したうえで外部委託による精査調査を実施する判断につなげました。調査の結果、既存特許との抵触なしとの見解を得て、大学本部費用負担による特許出願の決定に至りました。

【担当 URA コメント】



村田 昭子
特任教授 首席 URA

成果展示や学会発表に先立ち、URA が J-PlatPat(特許情報プラットフォーム)を用いた簡易な先行技術調査を実施することにより、公表可能な範囲および特許としての新規性が見込まれる範囲を整理・明確化しました。その結果を踏まえ、URA が研究者に対して発明届の提出を促すとともに、知財部門との事前ミーティングを設定し、研究内容の概要や技術的ポイントをあらかじめ説明しました。これにより、その後の研究者と知財部門との協議が円滑に進み、知財部門による本格的な先行技術調査の実施および、部門負担による特許出願方針の決定につながりました。このような特許出願推進の取組は、研究支援の現場で活動する URA の重要な任務の一つであり、今後は全学的な周知と共有が必要であると考えられます。(村田)

具体的な活動事例：FY2025 全学コアファシリティの強化

JASIS2025 でのコアファシリティ統括センターブースの出展

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 期間 2025 年 9 月 3-5 日
- 主催 一般社団法人日本分析機器工業会、一般社団法人日本科学機器協会

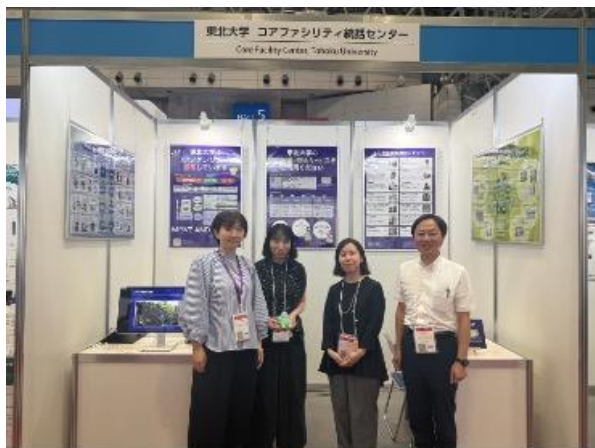


図 3.23 JASIS2025 でのブース出展の様子

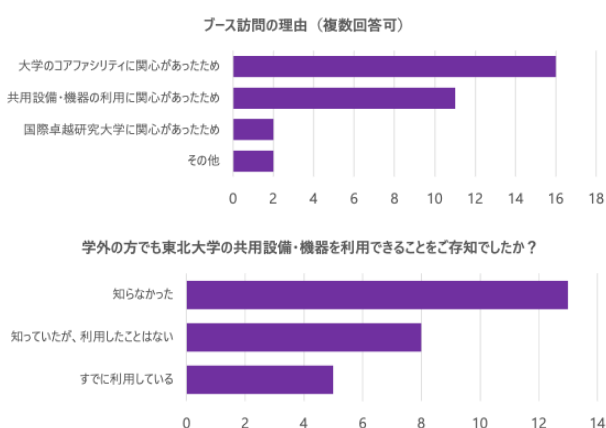


図 3.24 来訪者アンケート結果（一部抜粋）
アンケート回答者 26 名

■ 概要

日本分析工業会・日本科学機器協会が毎年度開催している「JASIS2025」の研究機関/学協会コーナーにおいてブースを出展しました。ブースには 3 日間で約 100 名が訪れ、コアファシリティ統括センターで行っている学内外への共用設備開放の仕組みや利用できる共用設備について来場者へ紹介し、学外からの共用設備利用に関する周知活動を行いました。

【担当 URA コメント】



坂園 聡美
特任准教授 上席 URA

他部局等 URA3 名

JASIS には国内外の機器メーカーが多数出展し、多くの研究機器ユーザーが来場します。そのため今回は、機器ユーザーをターゲットとして、東北大学の共用設備・機器を紹介・宣伝するブース展示を行いました。JASIS への出展は初の試みでしたが、具体的な機器名を挙げて質問される方も多く、本学が保有する研究設備・機器の潜在的なニーズを実感しました。企業や他機関からの共用設備・機器利用は増加傾向にあります。今後は、これらの利用を共同研究の進展へと繋げるための仕掛けづくりにも積極的に取り組んでいきたいと思ひます。（坂園）

具体的な活動事例：FY2025 全学コアファシリティの強化

「第 15 回 MaSC 技術交流会」開催支援

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 日時 2025 年7月9日
- 対象 学内外研究者、技術職員他
- 会場 片平キャンパス片平北門会館 2 階エスパス・セリシール



図 3.25 セミナーでの坂園 URA 登壇の様子



図 3.26 パネルディスカッションの様子

■ 概要

本セミナーは、片平地区の評価分析装置と技術職員の活躍、いわば「評価分析に係る評価分析」を起点とした各種連携の創出を目指す目的で開催されました。前半は、MaSC で分析装置を担当している技術職員より、各表面分析・加工装置の測定原理や対象範囲、性能の強みなど様々な分析事例の紹介がされました。後半は、コアファシリティの実際の利用方法について坂園 URA から概要説明があり、特別講演として IMRAM 寺内教授による SXES の開発者による強みや放射光施設との相補的活用についての講話、最後に、登壇者によるパネルディスカッションでは活発な討議が行われました。

【担当 URA コメント】



清水 一徳
特任准教授 上席 URA



坂園 聡美
特任准教授 上席 URA

他部局等 URA1 名

本セミナーでは、産学連携の多様な立場からの話として実際の測定・分析事例にてサンプル前処理やオプション機能などの紹介や企業担当者からも実際に活用した成果報告が紹介されて大変盛況であったと思います。また、今後の技術活用での有用な情報が盛り込まれた実践的な内容であったものと感じます。さらに、坂園 URA からコアファシリティの利用方法や実際の利用者からの Q&A を交えた効果的な活用法などを詳細に説明いただき、今後の学内共同利用設備・機器の活用拡大と研究推進の向上につながる貴重な機会を提供することができたものと考えています。(清水)

具体的な活動事例：FY2025 人材育成 URA 人材育成プログラムの整備

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 実施期間 2025 年 4 月～2026 年 3 月
- 対象 東北大学 URA 等



図 3.27 濱田志穂様(科学技術振興機構研究開発戦略センター)による講演後の記念撮影

■ 概要

2024 年 12 月に国際卓越研究大学 URA の公募開始に伴い、2025 年度には東北大学 URA が 100 人規模の体制になり、URA 未経験者の採用も一定数予想されたことから、体系的な URA 人材育成プログラムを整備しました。1.5 時間の研修を年間 40 回提供することとし、10 回を学内外有識者を招いた URA 連携協議会、30 回を業務スキルの向上のためのスキルアップセミナーに充てました。各回の実施内容、予定、運営体制を整えて実施しました。2025 年度実施結果を踏まえて、2026 年度の当プログラムは改訂を行います。

【担当 URA コメント】



臼澤 基紀
特任准教授 上席 URA

体系的な URA 人材育成を行っている大学はいくつかありますが、いずれも短期集中のプログラムであり、年間を通じて実施している大学はほかにはありません。JST が提供している URA 研修プログラム等を参考にしつつプログラムを作成しました。実施予定の作成にあたっては、公募要領や一部 URA、部局長との情報交換を基に、夏の部局評価対応を行う URA が多いことを想定し、年度初めに研究力分析ツールの使い方のセミナーを提供するなど、業務内容や年間スケジュールを考慮しました。

各回の実施を担当する URA を指名しました。担当は自ら講師をしてもよいし、学内外講師を招聘してもよいという実施方法を取り、RM センターの各 URA の持つ人的なネットワークの活用も行いました。

実際の運営に当たっては、講師へのリマインド、参加者への案内などの連絡業務が発生し、それらは実施日の異なる複数の回が並行して進むことから、連絡業務が複雑となることを予想しました。連絡漏れを防ぐためにリマインドメール作成の GAS による自動化を行い、大幅な業務効率の改善を実現しました。(臼澤)

具体的な活動事例：FY2025 人材育成 URA スキルアップセミナーの開催

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 実施期間 2025 年 4 月～2026 年 3 月
- 対象 東北大学 URA 等



図 3.28 スキルアップセミナーにおけるワークショップの様子

■ 概要

2024 年度後半に整備した URA 人材育成プログラムのうち、スキルアップセミナーを 30 回実施しました。第 1 週を除く毎週木曜日の 13:30～15:00 に片平キャンパスで開催し、各回 20～40 名程度が参加しました。SciVal の操作方法、学内共通機器の探し方など業務に必要な知識や情報の提供のほか、マインドセット、問題解決手法、コーチングなど URA に求められるソフトスキルへの注目を促すワークショップも取り入れ、JST の実施する URA 研修では学べない内容も提供しました。

【担当 URA コメント】



臼澤 基紀
特任准教授 上席 URA

今年度は URA 連携協議会を含む研修の実施回数が前年度までの 4 倍に増え、スキルアップセミナーは毎週実施という高頻度で実施しましたが、各回の担当 URA の協力により講師の急な変更や中止などの大きなトラブルもありませんでした。

企画の内容面では改善点があります。まず、参加率が全東北大 URA の 3～4 割に留まりました。新任 URA を対象とした研究として企画をしましたが、対象者への訴求力が不十分でした。具体的な業務内容や場面の想定に基づき各回の実施内容を検討するという点が不十分でした。

次年度以降は、業務経験や内容に応じた対象者の層別化や、業務上の困りごと解決に役立つ構成の工夫などを試行し、東北大学 URA のスキルアップに資するセミナーを提供したいです。(臼澤)

具体的な活動事例：FY2025 人材育成

URA 連携協議会の開催

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

- 実施期間 2025 年 4 月～2026 年 3 月
- 対象 東北大学 URA 等



図 3.29 赤池伸一様(文部科学省科学技術・学術政策研究所<NISTEP>総務研究官、内閣府科学技術・イノベーション推進事務局参事官)によるご講演の様子

■ 概要

2024 年度後半に整備した URA 人材育成プログラムのうち、URA 連携協議会を 10 回実施しました。毎月第 1 木曜日の 13:30～15:00 に片平キャンパスで開催し、各回平均 60 名程度が参加しました。そのうち 4 回を、学内で URA 研修制度が未整備の、主に小規模大学の URA を対象に公開とし、年度末 3 月は JINSHA フォーラムとして実施しました。産学連携機構、グローバル戦略推進室など URA 業務に関連する部署とのネットワーキング、他大学 URA との意見交換会といった交流を重視したもの、プログラム設計と評価など本学 URA として強化すべき内容、オープンサイエンスや責任ある研究・イノベーション(Responsible Research and Innovation: RRI)など最新の科学技術・イノベーションの動向に関する情報提供などを行いました。NISTEP、CRDS、未来工学研究所などから第一人者を講師として招聘しました。

【担当 URA コメント】



臼澤 基紀
特任准教授 上席 URA

URA 連携協議会は 2025 年度から実施しており、これまで約 100 回実施してきました。2024 年度からは臼澤が担当しており、一部学外公開も行ってきました。今年度はスキルアップセミナーも開催し、実施回数が大幅に増えたことから運営業務が複雑化すると予想していましたが、各担当 URA の協力により年度当初の予定をほとんど変更することなく実施できました。

一方、課題として会場の確保があります。研究推進系の多大なご協力により今年度は大きな問題もなく終了しましたが、次年度以降の改善が必要です。また、URA 連携のための機能が十分ではなく、この点でも改善が必要です。(臼澤)

具体的な活動事例：FY2025 人材育成

星陵地区部局 URA の医療関連研究支援勉強会・意見交換会の立上げ・運営

【URA 業務区分】

政策動向の調査・分析	研究力の調査・分析	研究戦略の策定
プロジェクト企画立案	研究チームの編成	関係者等との折衝・調整や契約業務
外部資金の獲得	進捗管理・予算管理	評価対応
研究成果の発信支援	報告書の作成	産学連携
国際連携	研究倫理・コンプライアンス	研究資料・データ等の管理支援業務
シンポジウム等の企画運営	研究広報、安全管理	その他

■ 実施期間 2025 年 10 月～

第1回 星陵地区部局URA会合

・日時：2025年10月15日（水）
10：30～
・場所：歯学研究所臨床研究棟3階（C01）C3セミナー室2
会場が分からない方は、歯学部食堂付近（C01 1階）で歯学研究所URAが待機して会場までご案内します（地図参照）。皆様のご参加お待ちしております！！



連絡先：歯学研究所URA室 dent-ura@gr.jp.tohoku.ac.jp

図 3.30 第1回星陵地区部局 URA 勉強会開催案内



図 3.31 勉強会の様子

■ 概要

星陵地区部局 URA の定例会議を新たに立ち上げ、10 月のキックオフ以降、月例会議を計 5 回開催しました。医療系部局特有の課題に対応するため、AMED 申請に必要な TPP 作成や、特許出願に向けた先行技術調査など、実際の支援事例に基づく勉強会・意見交換会を実施し、参加 URA の実務力向上に寄与しました。これらの取り組みにより、星陵地区内の URA 間の交流が深まり、支援連携の強化にもつながりました。

【担当 URA コメント】



村田 昭子
特任教授 首席 URA

まず、部局ごとに URA の人数、役割、経歴、ならびに部局固有のニーズが異なることについて、参加者間の相互理解を促しました。こうした共通認識を踏まえ、URA に共通する目標や必要なスキルについて自由に意見交換できる場を構築しました。その結果、部局横断的な情報共有が活性化し、競争的資金獲得支援の推進につながりました。

さらに、星陵地区以外の部局として学際領域研究部局 URA による活動紹介を依頼し、地区を超えた連携の可能性について議論する機会を設けました。これにより、今後、医療関連領域にとどまらず、医療関連領域外の部局 URA とも連携していくことの重要性を確認する機会となりました。こうした取組が全学的に拡大すれば、競争的資金獲得支援をはじめとする URA 活動の効果が、より一層全学的に波及すると考えられます。（村田）

おわりに

学内連携の強化に向けて

～人的ネットワーク調査から見る「つながり」の現在地と展望～

RMセンターは、2023年の組織改組を経て、全学的な研究推進・支援機能の強化に取り組んできました。本部と部局が一枚岩となり、多角的な研究支援を推進する中で、URA が学内の多様なステークホルダーとどのように結びつき、協働しているかを客観的に把握することは、より効果的な研究マネジメント体制を構築するための最優先課題です。

こうした背景のもと、2026年5月11日から15日にかけて、RMセンターに所属する全学担当 URA 全員を対象とした「人的ネットワーク調査」を実施しました。本調査では、2024年度と2025年度を振り返って、主に部局等に配置された URA、および大学本部等の関連部署の担当者に対する連絡頻度（「ほぼ毎日」から「数か月に1回程度」までの5段階）を自己評価してもらい、そのデータを基にアクセス状況の可視化（ヒートマップ作成とネットワーク分析）を行いました。

まず、全学担当 URA がアクセスしている学内の各部局・部署の関係性をマトリクス化した「アクセスヒートマップ」を以下に示しました。縦軸が全学担当の各 URA を示し、横軸が各部局・各部署を示しています。

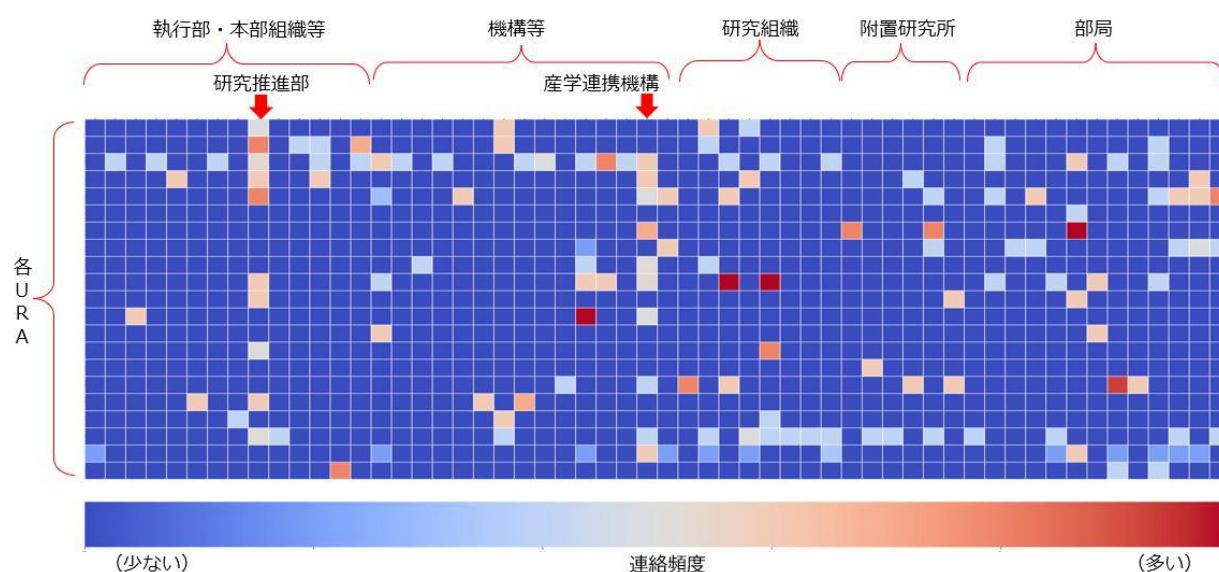


図 4.1 全学担当 URA がアクセスしている部局・部署（個別、縦軸:全学担当の各 URA、横軸:各部局・部署）

また、全学担当 URA について平均化すると以下のようにまとめられます。

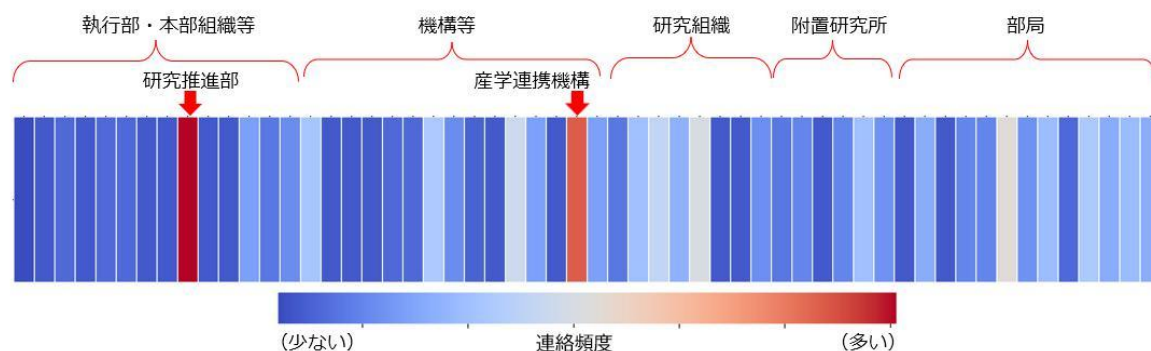


図 4.2 全学担当 URA がアクセスしている部局・部署（平均化、縦軸:全学担当 URA 全体、横軸:各部局・部署）

このヒートマップ上の「色の濃さ(連絡頻度)」を観察すると、特に研究推進部や産学連携機構に全体的に暖色(赤～オレンジ)が集中し、強固な関係が築かれている一方で、部局・部署レベルでのアクセスについては、URA ごとに大きな「偏り」があることがわかりました。

今回の人的ネットワーク調査から得た確かな客観的データを「羅針盤」とし、各部局・部署との信頼の絆をより深くし、また、より広範に紡ぎ直してまいります。また、この調査は今後も定期的の実施し、各部局・部署に対する、より高頻度・高密度なアクセスを推進します。さらに今後は、各 URA が研究の最前線にいる教員・研究者とどのような人的ネットワークを持っているのかも明らかにすることで、教員・研究者のニーズ把握、サービスの質向上のための基礎データの蓄積も行なってまいります。

RM センターは、単なる手続きの支援窓口にとどまらず、学内外の「知」と「人」、そして「組織」を結びつける「触媒」として機能し続けます。そして、有機的連携の深化を通じて、各 URA がそれぞれの強みを活かしながら、さらに機動的かつ柔軟に活動していくことで、東北大学の未来の研究力を力強く前進させる「共創のエンジン」へと進化してまいります。

Appendix:東北大学 URA 一覧 ※2026 年 3 月末時点

所属・配属先	氏名
全学担当	塩入 諭
	荘司 弘樹
	佐藤 準
	稲穂 健市
	堀野 秀幸
	吉田 明
	村田 昭子
	宮島 雅史
	仲島 義貴
	蔭山 麻里子
	菅原 良
	臼澤 基紀
	和田 匡路
	松原 雄介
	Hansen Marc
	Jason M. Sanderson
	境野 飛鳥
	千葉 俊樹
	川崎 能彦
	清水 一徳
	野澤 俊太郎
	坂園 聡美
	矢田 哲也
	Sow Boubacar
	中島 功雄
教育学研究科	志宝 ありむとふて
法学研究科	石田 真
理学研究科	高橋 亮
	亀高 愛
医学系研究科	村椿 智彦
歯学研究科	関口 雄介
	大堀 悠美
	鈴木 薫
薬学研究科	平澤 典保
工学研究科	池ノ上 芳章
	上岡 誠一
	中野 勝俊
	佐藤 祐一郎
農学研究科	竹岡 芳成
	清水 直紀
	平野 大二郎
国際文化研究科	石橋(長谷部)里花
情報科学研究科	澁谷 秋
	AI YU
生命科学研究科	高橋 さやか
	貞許 礼子
環境科学研究科	大庭 雅寛
	GRAUSE GUIDO

所属・配属先	氏名
医工学研究科	沼山 恵子
金属材料研究所	大石 毅一郎
	佐藤 敬浩
	遠藤 隆子
加齢医学研究所	鈴木 康弘
流体科学研究所	増田 尚則
	陳 怡 靜
電気通信研究所	但木 大介
多元物質科学研究所	愿山 郁
災害科学研究科	上野 史彦
	古屋 貴司
材料科学高等研究所	平賀 晴弘
	増田 幸一郎
	末光 眞希
	熊代 良太郎
変動海洋エコシステム高等研究所	Vani Novita Alviani
未来型医療創成センター	根本 靖久
学際科学フロンティア研究所	上野 裕
	波田野 悠夏
医学イノベーション研究所	藤沢 詩織
統合日本学センター	土井 幹裕
	中野 惟文
	浅沼 千恵
産学連携機構	加藤 敏夫
	小田 喜夫
	伊達 知秀
産学連携先端材料研究開発センター	森 綾香
東北メディカル・メガバンク機構	田澤 茂
知の創出センター	坪井 俊
	影山 徹哉
	古賀 高雄
	GRABOS ADRIAN
	黄 璐
コアファシリリティ統括センター	井内 勝哉
	森戸 春彦
	丸尾 知佳子
	中山 真由美
東北アジア研究センター	石井 花織
	楊 妍
先端量子ビーム科学研究センター	本多 佑記
半導体クリエイティビティハブ	清水 博子
オープンイノベーション事業戦略機構	谷口 伸明
	田谷 紀彦
研究推進部	菊地 俊郎
	美和 秀胤
	大森 由理

東北大学リサーチ・マネジメントセンター
アニュアル・レポート 2024-2025

2026年9月

国立大学法人東北大学
研究推進・支援機構 リサーチ・マネジメントセンター
稲穂健市、荘司弘樹、佐藤準、清水一徳、野澤俊太郎

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学材料科学高等研究所(AIMR)3 階

Tohoku University Research Management Center
Annual Report 2024-2025

September 2026

Research Management Center
Organization for Research Promotion
National University Cooperation Tohoku University

<https://ura.tohoku.ac.jp/>